

日本郭沫若研究会事務局

二〇一八年十二月二〇日発行

郭沫若研究會報

郭沫若・周作人交流特集号

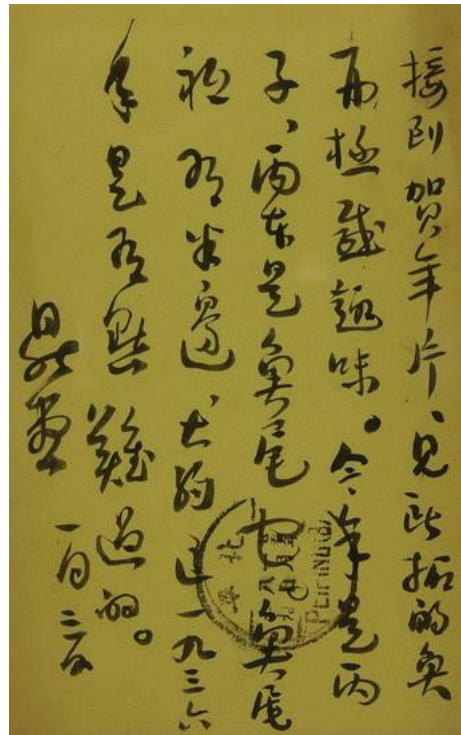
第二〇号 (総 No. 21)

目次

初公開資料 郭沫若の周作人宛てはがき	日本郭沫若研究会 会報編集部	／1
郭沫若の周作人宛年賀状の公開にあたって	日本郭沫若研究会	／2
簡単には入手できない貴重なはがき	郭 平英／岩佐 昌暲・訳	／2
郭沫若の周作人宛て年賀はがきについて	周 吉宜／岩佐 昌暲・訳	／3
郭沫若の周作人宛てはがきから読み取れる史事	蔡 震／岩佐 昌暲・訳	／4
郭沫若・周作人交流資料	藤田 梨那／岩佐 昌暲	／17
1、一九三四年文求堂 田中慶太郎宛書簡(8)	2、一九三三年容庚宛書簡(9)	
3、「周作人の郭沫若訪問」蔡震(10)	4、「国難の声の中で知堂を思ふ」郭沫若(11)	
知堂・周作人と鼎堂・郭沫若	吳 紅華	／12
知堂と鼎堂	劉 岸偉	／17
三十年の因縁をめぐる周作人の「懐の深さ」	武 継平	／21
一九三四年夏、周作人・郭沫若面会の背景——銭玄同致周作人書簡を手掛かりとして	中里見 敬	／25
小詩運動挫折 及びその行方——周作人・郭沫若・成仿吾の言説を読む	顧 偉良	／29
大躍進、調整時代、一九五八年から一九六二年までの郭沫若の文学と書		
——視察時に於ける第三期郭体から第四期郭体までの過程とその詩、書、思想	松宮 貴之	／33
執筆者紹介		／11
編集後記		／43

初公開資料

郭沫若の周作人宛てはがき



釈文（郭平英氏による）

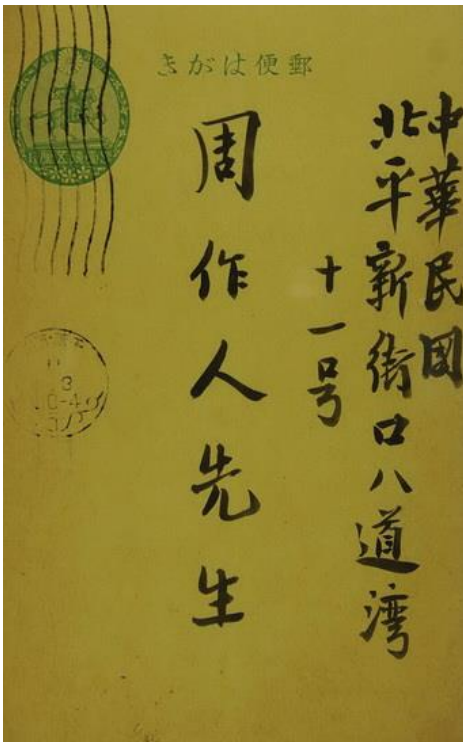
接到賀年片，見所拓的魚形極感興趣。今年是丙子，丙本是魚尾也。魚尾只有半邊，大約這一九三六年是有点難過的。

鼎堂 一月三日

訳文（岩佐昌暲）

年賀状頂戴しました。拓本にとられた魚の形には大変興味がわきます。今年の干支は丙子（ひのえね）ですが、丙の字はもともと魚の尻尾です。魚の尾は半分しかありませんね。たぶんこの一九三六年はいささか過（こ）しにくいでしょう。

鼎堂 一月三日



*年賀状表には差出人の住所氏名がない。消印

は「千葉市川／3／0・4」、本文に受取局の印「北平一月八日」とあるのが読み取れる。

*文中の「魚拓」等の内容については4頁～5頁の蔡震氏の解説を参照されたい。

郭沫若の周作人宛年賀状の公開にあたって

日本郭沫若研究会

郭沫若の周作人宛未公開年賀状を、当会の会誌『郭沫若研究会報』誌上で公開できることとなり、われわれは大きな責任と喜びを感じている。郭沫若と周作人は、中国現代文学の二大巨匠といっている。この二人の直接の交流については、従来ほとんど研究がなかった。二人の政治的、文学的立場や意見の違いに加えて、手がかりとなる資料がほとんどなかったからである。この度、二人の間で交わされたはがきの存在が明らかになったことは、これをきつかけに郭沫若や周作人の作家研究に新しい見方や論点を付け加える可能性の生まれたことを意味する。当会が大きな責任と喜びを感じると言う所以である。

当会会誌がはがきの公開の場選ばれたことになったのは、はがきを保存してこられた周吉宜前中国現代文学館副館長（周作人の長孫と、著作権継承者・郭平英前北京郭沫若記念館長（郭沫若の息女）のお二人のご厚意、当会に対する信頼と温かいご配慮による。公開に当って、お二人にその経緯を述べた文章を寄せて頂いたので巻頭文とする。（翻訳は岩佐昌暉）

われわれはその信頼と配慮に応え、会誌今号を「郭沫若・周作人二大文学巨匠交流特集号」として刊行するべく、交流を示す文献資料を収集し、また、関係の研究者による論文を募るなど、準備を進めてきた。今号が、今後のこの方面の研究の起点の役割を果たせれば幸いである。



簡単には入手できない貴重ながき

郭 平英

ことしの春節過ぎて間もないころ、岩佐昌暉先生からメールが届き、その知らせに私の胸は期待でいっぱいになった。周作人の子孫が、郭沫若から周作人に宛てた「未公開のはがき」を保存しているというのであ

る。

かなり以前、わたしは郭沫若が文求堂に宛てた書簡の整理をやり、後にはまた郭沫若の留学中の家族への手紙の勘考注釈作業に携わったことで、郭沫若と周作人の間のやり取りの資料に、わずかながら触れたことがあるが、結局分かったことには限りがあった。この度、岩佐先生は周作人の長孫（長男の長男）周吉宜先生の依頼を受け、周作人の子孫のこの「未公開のはがき」についての考えを私に詳しく紹介した。それは、郭沫若の著作権はまだ保護の期限内であり、はがきの発表には、まず事前に郭沫若の著作権継承者の承諾を得る必要があるということ、同時に郭沫若の子孫にも周作人の郭沫若宛書信（その写真）の収集を助けてほしい、ということである。周吉宜先生はまた特にこう付け加えていた。相手側に仮に書信が残っていてもかまわない。そうであっても周家側は郭家の子孫にこのはがきの写真を提供する。どうか日本郭沫若研究会から、これらの考えを伝えるよう力を貸してほしい。

この考えは確かに慎重でありまた誠意にみちていた。実際、周吉宜先生の推測通り、われわれは郭沫若が生前に残した手紙類に、周作人の筆になるものを目にしていない。郭沫若の日本亡命時期に受け取った手紙で、残されているものは大変大変少ない。日本亡命以前のものは、論外である。これは当然、郭沫若の生活の軌跡が決定したものだ。周家の子孫のご理解に感謝したい。

以前、私は数えきれないほど中国現代文学館に行き、さまざまな活動に参加したのだが、ついにずっと周吉宜副館長という、この博物館系統の同業の士と知り合う機会がなかった。まことに「陰差陽錯」（事が食い違つてうまくいかない）であったが、幸いにもこのたび縁あつて岩佐先生が間に入り橋渡しをしていただいた。

私は周吉宜先生と同じ意見である。この簡単には入手できない貴重な資料―郭沫若が一九三六年初めに周作人に送ったはがきを、岩佐先生が編集する『日本郭沫若研究会報』に渡して発表することに同意するものである。（2018年12月2日）

郭沫若の周作人宛て年賀はがきについて

周 吉宣

郭沫若先生の私の祖父への年賀はがきと、二人の交際については、研究したことがないので、何か議論をしようという気はなかった。だがたまたま岩佐先生から懇切な原稿の依頼を受け、情理ともにお断りしがたく、そこで年賀状公開にいたった経緯を簡単に述べて、なんとか責任をはたしたいと思う。

この年賀状が発表の運びとなったのは、読者もご存知の通り、実はこれもまたある偶然の出会いによるのである。

今年の二月のこと、私は娘の周一茗と招かれて九州大学の中里見敬教授の主宰された『春水』手稿と日中文化交流―周作人、冰心、浜一衛―国際学術集會に参加し、会場で偶然にも日本郭沫若研究会会長岩佐昌暉先生と出会った。だが慌たしいこととて、たいして交流もしないままだった。会議の後半、岩佐先生が参會者を案内して学内を參觀し、郭沫若先生留学当時の九州大学での勉強と生活を紹介された。先生の解説を聞き、展示されているさまざまな物や図片を見ながら、日本の学術界の歴史や文化に対する尊重、史料に対する重視に感動を禁じえなかった。たぶんそういうことがあったからだろうか、私はふいに我が家に郭沫若先生が一九三五年日本から祖父あてに出された年賀状のあったことを思い出した。

私はこのことを岩佐先生に話し、同時にこう伝えた。私と家族はみな史料は学術研究に用いるべきものだと考えており、日本郭沫若研究会に無償ではがきの写真を提供してもいいと思っている。ただ文字と書の商品として、その著作権は尊重されるべきだと思う。ただ郭沫若先生の子孫と連絡がないので、この問題を解決するにはいささか不便がある。

岩佐先生は、はがきのことを知って大変喜び、またわれわれの考えに賛同し、その場でこう言った。郭沫若研究会と自分は郭沫若先生のお嬢

さんと知り合いだから、自分が直接先方と連絡をとりましよう。

研究集會が終わってわれわれが北京に帰ってから、しばらくして、岩佐先生の連絡を受けて、郭沫若先生のご息女の郭平英女史が電話をかけた。その結果、すぐに話がまとまった―われわれの考えは完全に一致していたのだ。郭女史からはさらに、この年賀はがきを現在編集中の郭沫若書法全集に入りたいと申し出があり、われわれも無条件で支持すると伝えた。まもなく郭女史に委託された専門家がやってきて、この年賀状を撮影した。われわれもまた約束通り岩佐先生に写真を提供した。始めに書いた「ある偶然の出会い」の内容は、以上お話ししたことでおしまいである。だが、この年賀状の経歴については、まだもう少し書いておきたい。

周作人先生は、書信の保存を大変重視した。祖父は1917年北京に移って以後に受け取ったほとんどあらゆる書信を保存していた。だがこの年賀状とそれ以外の数万通の書信は、文革中の1966年に「紅衛兵」の暴挙に遭っており、今日まで残れたのはまことに偶然に属す。「紅衛兵」は「革命」に名を借りて周作人先生の家に闖入し、殴り、壊し、奪った。人は殴られ、家具はひっくり返され、畳は引き裂かれ、原稿や書信は床中に撒き散らされ、「紅衛兵」たちがそれらを踏んで出入りした。その後、部屋中のあらゆるものは持ち去られ、空っぽの部屋にわれわれの見知らぬ人が入ってきて住み込んだ。こうしてこのはがきを含む周作人先生のあらゆる財産は奪い去られ、行方不明となった。文革後われわれは絶え間なく搜索と追跡を続けたが、ついに二十二年後に北京魯迅博物館の所蔵品倉庫から、書信を含む遺失物の一部を探し出しとり返した。われわれにはこれらが魯迅博物館に「収蔵」されているすべてかどうかかわからないし、文革の大災害によって書信がどれだけ失われたかも知らない。だが、いま目にしているこの年賀はがきが、幸運にも探し出し取り戻した書信の中に含まれていることは知っている。

日本郭沫若研究会が私にこの年賀状の物語を語る機会を与えてくださったことに感謝する。(2018年11月29日 北京)

郭沫若の周作人宛はがきから読み取れる史事

蔡 震／岩佐 昌暲訳

郭沫若と周作人とは一九三四年周氏が日本を訪問した際に往き来があった。このことは『周作人日記』①、『郭沫若致文求堂書簡』②および郭沫若の日記「浪速日記」③に記されていることである。これがわれわれのこれまでに知る、二人の直接の交流に関する僅かな史料である。だが、二人の間に書信による交わりがあったかどうか、知ることとはできず、その後引き続き行き来があったかどうかについても、それを示すものがなかった。このたび初めて明らかにされた郭沫若の周作人宛のはがきは、むしろ大変な史料的价值がある。それはわれわれに以下のような二つの情報を伝えてくれるからである。

その一、郭沫若と周作人の間にはかつて書信による交わりがあった。一九三四年七、八月の後も、彼らは依然として手紙のやり取りを続けていた。

このはがきの冒頭に「年賀状を受け取りました」とある。これは、明らかに、郭沫若が一九三六年一月初めに周作人の年賀状を受け取った後の返事である。とすれば、常識的に言って、二人はこの前の一九三五年の元旦の際にも、新年のあいさつを交わしていたはず、と断定してよからう。そしてその後の一九三七年の元旦にも、おそらくこのような新年のあいさつは中断しなかっただろう。年賀状以外に二人の間に書信のやりとりがあったか、ということになると、当然、実物あるいはその他の史料で実証しなければ確かな判断は下せない。だが一九三四年に周作人が「小寓江戸」（東京に短期滞在）していた期間の郭沫若との往來の状況（郭沫若に文求堂・田中慶太郎への紹介を依頼し、彼を訪問している）から言えば、少なくともその期間、およびその後

の一時期は手紙をやりとりしていたはずである。

その二、郭沫若と周作人の書信の往復は、単なる儀礼的なあいさつにとどまるものではなく、文学を語る友人同士の交流というものだったはずである。

もし、ただか新年のあいさつ程度のものであったとしたら、郭沫若が周作人に宛てたこのはがきの公表は、やはりせいぜい彼ら二人の間に書信のやり取りがあったという史実を確認するだけのものということになる。だが、はがきに述べられていること、即ち、魚の形の拓片（片）に関する言は、この度の年賀のやり取りのはがきに、儀礼的な挨拶以外に、もっと多くの歴史的な情報を伝えさせていると思う。

はがきによれば、周作人が郭沫若に送ったものには、年賀状のほかにも、もう一つ魚形の拓片があったはずである。これはもちろん新年の祝賀以外の事である。周氏がなぜこの拓片を郵送したのか、何の理由もないわけがない。彼自身が自分からわざわざ郵送したのか、それとも郭沫若の求めに応じて送ったのか？私は当然後者だろうと思う。これは、たぶん郭沫若がこれ以前に書いた「丙子の字に就て」（7頁参照）という文章と関係があると考ええるからだ。

この文章は日本語で書かれ、雑誌『書道』昭和十一年一月一日第5巻1月号に発表された④。『書道』は泰東書道院⑤が発行している月刊誌で、郭沫若の書いた文章は依頼原稿だったであろう。というのも一九三六年は干支紀年法によれば丙子の年であり、この雑誌は明らかに何か話題になるような文章を載せたいと思っていただろうからである。「丙子の字に就て」は字源の進展変化から「丙子」という二文字の本義を解説し、「丙」の原義は「魚の尾」、「子」の原義は人間の赤ん坊⑥だとしている。さらに面白いのは、この文を載せた『書道』1月号の表紙のデザインで、誌名の両側に、二つの魚形の紋様が対称形に配されているのである。



郭沫若の文章は三

五年十一月二七日に

書かれた。彼はその

中で『爾雅』⑥の「𩺰

魚」が「魚尾謂之丙

（魚尾、之を丙と謂

う）」と解しているの

は、「極めて原始的な

象形文字で、恐らく

はやはり狩猟時代の

絵文字の名残であろう」と見ている。だとすれば、彼は必ずやそれに

相応する原始的な魚形の拓片を探し出して文章に添えたいと考えたであ

ろう（実際に例えば文中で殷周時代の干支記日法に触れたときには、

殷契卜辞の図片を使っている）。だが手近に一時見つからなかった。そ

こで、こう推測したらどうだろうか。郭沫若はある時の書信で、周作人にこのことを伝えた。そこで周作人は魚形の拓片を探して郭沫若に送った。だが、残念なことに、周氏のこの手紙が日本に届いたときには、『書道』はすでに出版された後だった、という推測である。あるいはまた、周作人の送った拓片は「魚尾が半分しかなかった」ため、雑誌に掲載するにはふさわしくなかった、という推測である。

だが、その推測のどちらかに関わりなく、郭沫若が周作人に送ったこのはがきに書かれた内容は、二人の書信のやりとりが、互いの儀礼的な時候やご機嫌伺いなどのあいさつの範囲を超えており、二人が恐らく文学上の同志のような書信上の付き合いができていたことを、はっきりと示しているのである。あるいは、まさにこのような友情があったからこそ、郭沫若はその後1938年に周作人が飛行機をチャーターして南下しようとしているという話を伝え聞いたとき、直ちに「国難声中懐知堂（国難の声の中、知堂を懐く）」⑦を草し、かつ、文中

で周作人に対し、あの真情あふれる切実なことを述べたのである。

郭沫若は、日本亡命時代に、国内の多くの学者や、文学上の友人たちと、いずれも書信のやり取りという方法で交際を始め、かつ、例えば容庚⑧との交わりがそうであるが、ずっと良好な関係を保ってきた。そして董作賓⑨との交流に至っては「十年神交（十年間、書信による心からの交わり）」の後、ようやく「握手言歡（手を取り合って喜ぶ）」⑩（10）ことができたほどだった。

書信は日本亡命期間の郭沫若にとって友人と交流する重要な方法であり、むしろ我々がこの時期の郭沫若の普段の活動や、学術研究、文学創作等々を知るための最も重要な文献資料である。もし郭沫若が周作人に宛てたこのはがきがこのような意義を具えているならば、我々にはもっと大きな期待がもてる。我々は郭沫若と周作人の間にこれ以外の書信がまだあるのではないか、そして探して発見できるのではないかと期待するのである。

郭沫若は亡命期間中、東京本郷の中国書専門店・文求堂主人、田中慶一郎父子の世話になり、親交を深めた。とりわけ彼の金文・甲骨文字研究に文求堂が果たした役割は大きい。本書は、1931年6月から37年6月までに郭沫若が田中父子に送った230通の書簡本文の影印と釈文を収めたもの。郭沫若の亡命生活のうち、例えば周作人訪日時彼の彼との往來の具体的な事実を記す書簡なども含むが、その他の多くは亡命期の活動で最も重要な部分を占める古代文字研究に関わる書簡。彼の金文・甲骨文字研究の背景を知る貴重な史料集である。これらの書簡は田中の娘婿の増井経夫（金沢大学名誉教授）が保管していたが、増井の同意の下、1986年から伊藤虎丸（東京女子大）、

訳注

1『周作人日記』は、周作人の1898年1月28日から1966年8月23日までの六十六年間の日記。魯迅博物館が所蔵していた自筆本の影印本。1996年、大衆出版社から上・中・下の3巻に分けて刊行された。

2 郭沫若は亡命期間中、東京本郷の中国書専門店・文求堂主人、田中慶一郎父子の世話になり、親交を深めた。とりわけ彼の金文・甲骨文字研究に文求堂が果たした役割は大きい。本書は、1931年6月から37年6月までに郭沫若が田中父子に送った230通の書簡本文の影印と釈文を収めたもの。郭沫若の亡命生活のうち、例えば周作人訪日時彼の彼との往來の具体的な事実を記す書簡なども含むが、その他の多くは亡命期の活動で最も重要な部分を占める古代文字研究に関わる書簡。彼の金文・甲骨文字研究の背景を知る貴重な史料集である。これらの書簡は田中の娘婿の増井経夫（金沢大学名誉教授）が保管していたが、増井の同意の下、1986年から伊藤虎丸（東京女子大）、

馬良春(中国社会科学学院)の二人を代表とする日中の共同作業によって整理・編集がおこなわれ、1997年12月に文物出版社から刊行された。編者の伊藤・馬両教授の後記を付す。

3. 「浪花十日」は1934年夏、郭沫若が家族とともに千葉県夷隅(いすみ)郡浪花(なみはな)村の岩和田地区(現在は夷隅郡御宿町)に海水浴で滞在したときの日記。日記によれば、浪花村へは市川から船橋経由で千葉まで出て、千葉から房総東線(現在の外房線)に乗り換え御宿駅で下車した。ここは房総半島の中央にあたる、太平洋に面した村で、角川日本地名大辞典によれば1935年の人口は2383人。岩和田一帯は美しい砂浜の続く海岸で、現在は海水浴場も多いが、当時も知られた海水浴場だったのであろう。郭沫若は家族より数日遅れて末っ子の淑子と31日夜到着、その日から8月9日まで滞在し、泳ぐ傍らH・Gウェールズ『生命の科学』(1934年10月第1冊が上海商務印書館より出版)を翻訳した。8月2日に一家で遠出して渡月という海岸に行き、素っ裸で泳いでいたとき、海から帰ってきた海女の集団に会ってからかわれたことを書いている。郭沫若は知らなかったようだが、この岩和田一帯は三重県の志摩、石川県の舩倉島と並ぶ日本三大海女集落と言われる所である。3日には刑事が「名士」の保護に来た」と称して監視に訪れ「心中すこぶる不愉快」と書く。6日に徐租正から周作人が会いたいと言っているという手紙が来て、「豈明先生の生活は実に羨ましい。…豈明先生の交友の相手は文人墨客なのに、私の相手は刑事と憲兵だ」という皮肉交じりの不満を書きつけるのも、3日の不愉快な記憶があったからだろう。「浪花十日」は『革命春秋』のうち『帰去来』に収録。全集・文学編第13巻377頁〜396頁。小野忍・丸山昇による邦訳『郭沫若自伝5』平凡社・東洋文庫、「浪花十日」は119頁から139頁)があり、ここの訳文は同書に従う。

4. 【参考】に付した、蔡震「丙子の文字について」を参照されたい。

5. 泰東書道院は、「書道ノ普及向上ヲ図リ国家ノ文化ヲ裨補スルヲ以テ目的」として1930(昭和5)年に設立された書道団体。総裁に皇族を戴くこと

を会則にうたい、総裁は東久邇宮、名誉会頭は牧野伸顕、会頭は伯爵清浦清吾が就任した。中村不折も「総務」の役職についている(以上、国会図書館「渋沢栄一伝記」デジタル版による)。昭和期には、この他に大きな団体としては東方書道会(昭和7年4月創立、大日本書道院(昭和12年4月創立)があり(近藤高史『明治・大正・昭和書道史年表』木耳社、1985年6月)、泰東を合わせた三団体で昭和の書道界を三分した。

6. 『爾雅』は、中国の最も古い字書。十三経の一つ。

7. 11頁の拙訳参照。

8. 容庚(1894〜1983)字は希白。広東省の人。金文の専門家。北京大学研究所国学門研究生出身。27年から燕京大学に。教授、『燕京学报』主編。抗日戦争勝利後、広東に帰り、嶺南大学、中山大学教授。1929年8月日本亡命中の郭沫若が「未知友 郭沫若」の署名で教えを乞う手紙を出したのがきっかけで、書信による交流が始まり、1935年11月までの書信だけで56通に上る。内容は殆どが殷墟甲骨文と殷周青銅器銘文に関するやり取りである。これらの書簡は容庚の助手だった曾憲通(1935〜、中山大学教授)の手で整理され出版された(曾憲通編注『郭沫若書簡一致容庚』広東人民出版社、1981年5月)。同書に付された容庚の「懷念郭沫若同志(代序)」によれば、郭沫若と容庚が初めて顔を合わせたのは1946年、広西大学に赴任する容庚が途中重慶に立ち寄った時だったという。

9. 董作賓(1895〜1963)字は彦堂。河南省南陽市生まれ。甲骨文、古文字学の専門家。北京大学研究所国学門研究生出身。1928年〜37年まで安陽の殷墟で発掘と甲骨文字の研究に従事。46年国民政府中央研究院歴史言語研究所研究員。48年中央研究院に従って台湾に移る。台湾大学教授、中央研究院歴史言語研究所所長、香港大学教授などを歴任。郭沫若の学問への尊敬の念は変わらなかったという。

10. 郭沫若と董作賓の交流は1932年夏秋の頃に始まる。郭が『卜辞選釈』(後の『卜辞通纂』)の執筆に着手した頃である。郭は当時殷墟で発掘にあっていた董に手紙を書き、殷墟の陶器のある刻文を探してもらえないかと

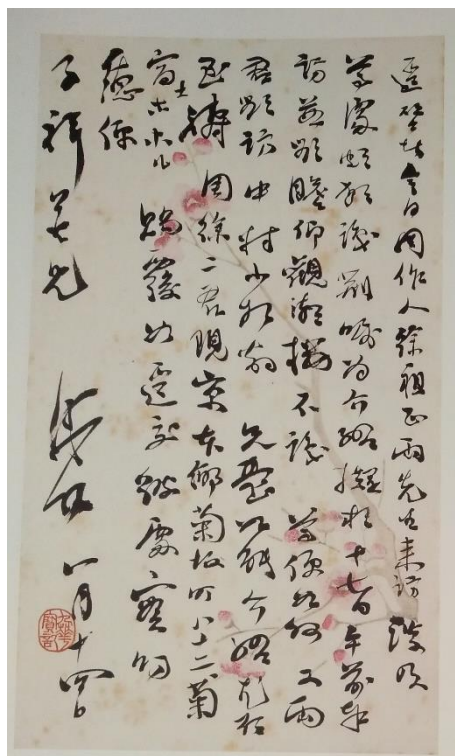
郭沫若・周作人交流資料

郭沫若と周作人の直接の書信のやり取りはこれまで発見されておらず、今号で紹介した年賀状が唯一のものである。だが、二人の交流を示す書信や文章は存在する。今号では、一、郭沫若の文求堂・田中慶太郎宛書簡2通、二、容庚宛て1通および、四、田中慶太郎宛書簡に關する蔡震氏のエッセイを併せて紹介する。

このうち書簡資料は、郭平英氏の提供による。翻訳は、一、二、三を藤田梨那が、四、を岩佐昌暲が担当した。

資料一、一九三四年文求堂・田中慶太郎宛書簡

1 八月十四日 書簡



【訳文】

逕敬者、今日周作人、徐祖正兩先生來訪、談及尊處、頗願識荆、囑為介紹。擬於十七日午前奉訪、欲瞻仰觀潮樓、不識尊便如何。又兩君欲訪中村不折翁、兄臺如能介紹、尤所至禱。周、徐二君現寓本郷菊坂町八十二、菊富士木広ル。

賜吳如逕交彼處、實叨德便。

沫若 八月十四日

子祥尊兄

【訳文】

ご連絡申し上げます。今日周作人、徐祖正①両先生が来訪して、話は文求堂に及び、是非お知り合いになりたく、紹介するよう頼まれました。十七日午前中にお訪ねしたいと考えています。合わせて観潮楼②を拝見したいと思います。ご都合いかがでしょうか。また、両君は中村不折③翁を訪問したいと希望していますが、もしご紹介いただければ、幸いに存じます。周、徐両君はいま本郷菊坂町八十二、菊富士④木広ルに宿泊しています。

直接お越しいただければ、大変ありがたく思います。

子祥⑤兄様 沫若 八月十四日

【訳注】

- ① 徐祖正 文学者・北京大学教授。周作人とともに来日した。
- ② 観潮楼 森鷗外の居宅。当時は田中慶太郎の住まいだった。
- ③ 中村不折 書家。本号の中里見論文参照。
- ④ 木広ル (Goaru) 〓ホテルの意。原文は、片仮名の「ホ」を漢字の「木」に「テ」を「広」に誤解し、その漢字を書いている。
- ⑤ 子祥 田中慶太郎の字。

2 八月十八日 書簡(写真省略)

【訳文】

昨日偕周、徐二君奉訪、多蒙懇意招待、歸時更蒙嫂婦人送至御茶水、感激感激、所説書為《洛陽故都古墓考》(弟處所有一冊。如需要時可奉借以作樣本也)、懷履光著、英名為 Tombs of Old Lo-yang by William Charles White, 上海黃浦灘路別發行出版。尊處可轉托內山書店代購、在日本當能行銷若干部也。專此鳴謝、即頌
暑安

郭沫若頓首 八月十八日

【訳文】

子祥老兄

昨日周、徐両君と共にお訪ねした際は、丁寧なおもてなしをいただき、帰りにまた奥様にお茶の水までお送りいただき、感激しております。お話しされた書物は『洛陽故都古墓考』です(私の所に一冊あり、必要であれば見本としてお貸ししてもよろしいです)。懷履光著、英語名は Tombs of Old Lo-yang by William Charles White、上海黃浦灘路別發行出版。内山書店に委託して購入してもらえます。日本でいくら売れると思います。お礼まで。
暑さのみぎり御身お大切に。

郭沫若頓首 八月十八日

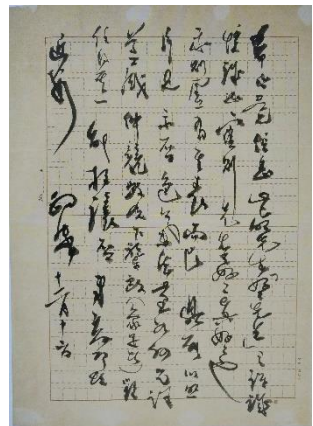
資料二、一九三二年容庚宛書簡

【訳文】

希白吾兄

信悉。豈明先生“好好先生”之評、誠惶誠恐、實則先生之好好真好好也、我則虛有其表而已。鼎能以照片見示否?色氣質量如何?乞詳。尊藏仲競□、及乍□□(象足者)欲任得其一、能相讓否?專復即頌
近安

郭沫若 十二月十二日



【訳文】

希白①兄：

お手紙を拝受。豈明先生②の「好好先生」の評は誠に誠に恐縮に存じます③。実のところ、先生の好好は本当に好好なのです。私のは中身がなく、ただ表面がそうであるにすぎません。鼎は写

真をお見せいただけますか、色合いと質はどうでしょうか、詳しくお伺いしたいと思います。ご所蔵の仲競□及び乍□□④(足を形どったもの)のうち、どれか一つをいただきたいですが、お譲りいただけますか。まずはお返事まで。
近頃の平安をお祈りします。

郭沫若 十二月十二日

【訳注】

- ① 希白 容庚の字。容庚及び郭沫若と容庚の関係については6頁註8参照。
- ② 豈明先生 周作人。
- ③ 好好先生 不詳。「人とうまく付き合えるいい人」の意か?ここは文意から、容庚が周作人から受け取った手紙に郭沫若を「好好先生」と評した文字があり、それを郭沫若に伝えたものであろう。してみればこの時期、郭沫若と周作人は何らかの接触、手紙のやり取りなどがあつたかもしれない。具体的なことは不詳だが、交流の可能性を示す資料として紹介した。
- ④ この手紙は、郭沫若が容庚の所蔵する鼎を譲ってほしいと依頼する内容。「競□及び乍□□」の□は、鼎に彫られた銘の一部のようだが、相当する文字がないため空白にしている。『郭沫若書簡致容庚』広東人民出版社、一九八一年、一二三頁参照。

郭沫若と周氏兄弟の関係はとても面白い。彼が文壇に入ってから魯迅との筆による論争はほとんど中断することはなかった。後年互いに敬意を示したこともあったが、ついに直接会うことがなかった。魯迅が亡くなった後、郭沫若が「大なるかな、魯迅」と言ったのは心からの称賛である。しかし、周作人が漢奸文人とされる前まで、郭沫若と周作人の間に文筆上の齟齬はなかった。抗日戦争が勃発した頃に郭沫若は「国難の声の中、知堂を懷う」という一文を書いて、「近年来文化界で一家言をなし、国際の友人とも対等に渡りあい、わが民族のために幾分かの人格を勝ち取っている」(1)何人かの人の一人として、周作人を称賛している。彼ら二人は面識があった。『郭沫若年譜』(龔濟民、方仁念)に郭沫若と周作人の面会についての記載は二か所がある。しかし、そのうちの一か所は言葉が不明瞭である。もう一か所は誤記である。郭沫若には「浪花十日」という一文があり、1934年夏(8月)彼が海辺近くの浪花村に十日ほど滞在したときのことを記している。文中に、徐耀辰(祖正)から手紙が来て、江戸(東京)に宿泊している周作人が会いたいと言ってきた。『郭沫若年譜』の記載はこれに基づいている。しかし、二人が面会したかどうかは曖昧である。なぜなら、郭沫若は書いていないから。年譜のもう一か所は36年2月の本月事項に、「周作人と会う」と記している。基づく史料は陶亢徳「知堂と鼎堂」中に見られる、周作人36年2月27日陶亢徳宛書簡に「鼎堂と会って大いに談ずる」という一文であるが、なおこれは誤記である。この二つの誤記は、『郭沫若致文求堂書簡』と『周作人日記』によって証明することができる。

34年8月14日郭沫若が、文求堂主人田中慶太郎宛書簡に、「今日周作人、徐祖正両先生が来訪し、話は文求堂に及び、是非お知り合いになりたく、紹介するよう頼まれました。十七日午前中お訪ねしたい

と考えています。合わせて観潮楼を拝見したいと思います。ご都合いかがでしょうか」とある。8月18日のもう一通の手紙にまた次のように書いてある。「昨日周、徐両君と共にお訪ねの際は、丁寧なおもてなしをいただき、帰りにまた奥様にお茶の水までお送りいただき、感激しております。」(2)これによって、周作人が34年8月14日に市川市にある郭沫若宅を訪ね、郭沫若と会い、17日に郭沫若が周作人を伴って田中慶太郎を訪ねたことが分かる。『周作人日記』にも17日に田中慶太郎を訪ねたことが記されている。「午前、耀辰と一緒に文求堂に行き、田中君を訪ねる。しばらくして郭沫若君も来た。連れだつて千駄木町の田中宅すなわち旧森氏観潮楼に行く。お昼は大学の前の「鉢の木洋食」で田中夫婦のご馳走になる。午後一時半に宿に戻る。」(3)とある。森氏はすなわち日本近代の著名作家森鴎外である。

周作人の訪日は、日本国籍の夫人が帰省するのに同伴するためであったが、同時にまた学者という身分で東京に現れたわけである。従つて、彼を接待し、彼を訪ねていく人は、大半は文化學術機関と文化人であった。例えば、日華学会、明治文学談話会、「中央公論」社など。郭沫若はこれに対して、「豈明先生は黃帝の子孫、私も黃帝の子孫だ。豈明夫人は天孫人種、私の夫人も天孫人種だ。しかし、豈明先生の交遊相手は騷人墨客であるのに対して、私の友達は刑事と憲兵だ。」(4)と感慨をもらした。

周作人日記、年譜等の関係資料に明らかなように、36年2月の時点では周作人が北平にいて、郭沫若と会う可能性はなかったのである。

注

- 1 郭沫若『難声中懷知堂』『郭沫若全集・文学編』第18巻、152頁
 - 2 『郭沫若致文求堂書簡』152・153号、文物出版社、1997年12月
 - 3 『周作人日記』大象出版社、1996年12月
 - 4 『浪花十日』『郭沫若全集・文学編』第13巻、392頁
- *本文は蔡震『文化越境的行旅——郭沫若在日本二十年』文化芸術出版社、2005年、所収の「郭沫若流亡日本期間若干史料史実的考弁」364～366頁による。

資料四、国難の声の中で知堂を思う 郭沫若

古人に「戦いの攻め太鼓の音を聞けば則ち将帥の臣を思う」という語がある。いまや国難は厳しく深刻で、飛行機や大砲の襲撃の中で、世間は多く某司令、某抗敵將軍、某民族英雄を心配しているが、私が帰国以来常に心にかけているのは、北平の苦雨齋の中のわれらが知堂である。

彼のあのたおやかで内容のある文章は、近頃「宇宙風」誌上ですでに何週間も目にしなくなった。覚えていたのだが、最後の一文の末尾は、苦雨齋を「苦住齋」としていた。敵の包囲の中で苦住している知堂は、いま一体どうしているのだろうか。

おととい王劍三（作家・王統照。劍三は字。）が私を訪ねてきた。かれは青島から上海に帰ってきたばかりだったが、私は彼に知堂に関する消息がないか聞いてみた。

彼の話では、知堂が九千元で飛行機をチャーターして南下しようとしているというデマがあるようだ。

だがこの「デマ」、私は逆にそれが本当であればいいと願う。九千元ぐらいが何であろう。混乱の時期に九千元の現金を出そうというのは、いささか誇張をまぬがれないにしても、しかし、われわれがもし一人の知堂を失うとしたら、その損失は計り知れないものだ。

ここ数年来、文化界にあって風格を打ち立てることができ、支えることができ、国際的友人と渡り合って、わが民族のために何分かの人格を勝ちとり得る人間は、それほど多くいるわけではない。そしてわれわれの知堂は、この多くない中でも一頭地を抜く者なのだ。若い人たちが必ずしもことごとく理解しているとは限らないけれども。

「もし身代わりになれるものなら、わが身を百回差し出してもいい」知堂がもし本当に飛行機で南に来ていいのであれば、例えば、私のような人間が、彼と交換するため、何千何百人死のうとたいした

ことではない。

日本人で知堂を信頼する者はかなり多い。もし彼を南に來させることができるならば、私は思うが、もう彼に何かの言論を発表させる必要はない。その南下という行為が、横暴なる日本軍部にとって、人間的自由を失い、国を挙げて軍備に狂奔する日本人にとって、おそらくもう十分に鎮静剤であろうからだ。

書きたいことはまだまだある。だがこれで切り上げよう。

一九三七年八月二十三日



本号執筆者紹介（掲載順）

- 郭 平英（かく へいえい） 前北京郭沫若記念館館長
周 吉宜（しゅう きつぎ） 前中国現代文学館副館長
蔡 震（さい しん） 中国郭沫若研究会執行会長
岩佐 昌暉（いわさ まさあき） 九州大学名誉教授
藤田 梨那（ふじた りな） 国士館大学教授
吳 紅華（ご こうか） 九州産業大学教授
劉 岸偉（りゅう がんい） 東京工業大学教授
武 継平（ぶ けいへい） 福岡県立女子大学教授
中里見 敬（なかさとみ さとし） 九州大学教授
顧 偉良（こ いりよう） 弘前学院大学教授
松宮貴之（まつみや たかゆき） 書家・西安培華学院客員教授

知堂・周作人と鼎堂・郭沫若

呉 紅華

まさに郭沫若が言った「中国文壇の大半は日本留学生によって構築された」(『桌子的跳舞』)ように、草創期の日本留学生の活躍は突出していた。周作人と郭沫若の二人もまた、日本留学経験者であり、一九二〇(三〇)年代における二大文学団体である文学研究会と創造社の中心的存在であった。周作人(一八八五―一九六七)は、明治末期の五年半を、郭沫若(一八九二―一九七八)は、大正初期の十年を日本で過ごした。

郭沫若はまた、国民政府の逮捕状を受けて、一九二八年から一九三七年にかけて日本に亡命しており、日本での生活は、合わせて二十年にわたる。一方、周作人は、戦後、日本に協力したかどで「漢姦」罪に問われ、三年にわたって南京に収監された。

この二人は、家庭状況も似通っていて、ともに日本人を妻に迎え、どちらも大家族を養う義務を負っていた。

それでも、留学した時期の違いから、二人の日本文化受容には相違が見られる。また、それぞれの文学的な思想、取り巻く環境、個々の才能、性格などの要素が加わり、彼らは同じ時代の文壇で活躍しながら、決して親しくはなく、一九三四年の面会以前は、むしろ対立関係にあったと言える。

一、文学研究会への対抗意識

一九一七年に始まった中国の新文化運動は、主に『新青年』を舞台に繰り広げられた。魯迅や周作人は、ここに翻訳、文学評論、小説などを次々と発表し、思想革命・文学革命の旗手として注目された。

郭沫若は、これに一步遅れる形で登場した。彼の代表作『鳳凰涅槃』は、魯迅の『狂人日記』や周作人の『人の文学』に二年遅れての発表となった。また、彼は当時まだ日本において医学を学んでいる最中であつたため、初期の新文化運動の最前線にはいなかったのである。

それでも、彼は成仿吾・郁達夫らとともに、日本で創造社を結成した。彼らは、大正期のロマン主義や反現実主義、新心理主義、後にはプロレタリア文学などの影響を受けつつ、最初は偶像破壊、次に革命文学を標榜して、詩や小説、エッセイなどを発表していた。彼らの『創造季刊』創刊号に、「文化運動発生以来、我が国の新文芸は、一、二の偶像に独占されている」との出版広告を掲載し、既成勢力だった文学研究会への対決姿勢を表明する。

周作人は、郭沫若らにとつて、北京文壇を独占する「一、二の偶像」であつた。郭沫若が、一九二〇年十月十日付『時事新報・学燈』双十節増刊の中で、自分の詩劇『棠棣之花』の前に周作人の翻訳文が掲載されたことに不満を抱き、編集長の李白岑に、「創作は処女、翻訳は仲人だ」(1)と主張したのも、周作人への対抗意識の表れである。

また創造社初期メンバーだった張鳳拳と徐祖正は、のちに北京大学に招聘され、創造社との関係を絶つた理由について、郭沫若は『創造十年』の中で、「重要な原因は、おそらく、やはりあの『一戦』だったろう。あの『一戦』が、われらの北大教授周作人導師のご機嫌を損じたことだけは、まぎれもない事実である」と述懐している(2)。

掲載順をめぐる争いは、一九三三年創刊の雑誌『現代』においても起こった。編集者である施蛰存からの依頼を受けた郭沫若は、「離沪以前」連載を承諾したものの、『現代』第四巻一号において、周作人の「苦茶随筆——性的心理」が自分の連載記事の前に掲載されたことを知るや、連載中止を申し入れている。施蛰存は慌てて郭沫若をなだめる一方で、一時は連載中止予告を出すこととなった。結局、郭沫若が説得に応じ、連載は継続したものの、施は、第四巻二、三号編集後記で郭

沫若に格別の配慮を示すはめになった。さらに、周作人の「苦茶隨筆」の続編は、『現代』掲載をとりやめ、『大公報』や施肇存が別に主編していた雑誌『文飯小品』に掲載された。

ところで、こうしたいざごさは、結局は単なる席次争いであり、文学理論上の論争というわけではなかった。周作人自身がこれについて発言することはなかった。しかし、魯迅がマルクス主義への傾倒を強めるなか、上海において左翼作家連盟が結成されるに及んで、周作人は、左翼文芸運動や魯迅の私生活に当てこする内容の文章を多く発表するようになった。その中で、周作人は、文芸上の主義論争について過激な表現を用いて罵倒し、理論の単純化とスローガン式言語表現に反対した。そして、郭沫若らの創造社や、左翼に転向した魯迅らを時流に迎合する「載道文学」であると批判し、自らは林語堂らとともに「言志文学」たる閑適小品を発表して、「中国新文学の源流」に示される文学史観を提唱するに至った。

一九三〇年三月発表の「金魚」(3)は、文壇の現状に危機感を覚えた周作人の発した、重要なメッセージである。

「金魚」は、彼の草木虫魚シリーズの初編であるが、観賞用の生きものである金魚は結局のところ飼い主無しでは生きられぬという本質を独特の言い回しで表現しつつ、実は、上海の普魯(プロ)職業文士たちも、結局は誰かに食わせてもらわなければやっていけない連中であり、その誰かの宣伝道具に過ぎないのだと諷刺しているのである。つまり、周作人は、革命文学を標榜する左翼文学に対し、「金魚」を通して遠回しに批判し、あわせて自らの文学観を表明しようとしたのだった。

ただし、周作人は、特定の個人に対する批判ではないとしている。「金魚」に寄せられた批判について、彼は、黎錦明へ宛てた「普通の手紙」(4)の中で次のように述べている。

実をいうと、私は郁達夫・郭沫若ら諸先生方にずっと相当の敬意を抱いていた。しかし、上海文壇の論戦を見ると、まるでたくさんのはさみ店が争っているかのようである。なぜあのように悪戦苦闘しているのか、それすらわからない私が、その中心に突っ込んでいって、その集団の一兵卒だと思われたりしてはなるまい。私は多くの事に対して、確かに多くの意見を抱いている。例えば、次のようである。

一、文学には言志派と載道派があり、お互いに反発しあい、永遠に正統たり得ない。

二、文学には何ものも煽動する能力はない。

三、文士という職業は資本主義の私生児である。合理的社会において人はそれぞれ正当な職業を持ち、文学とは、たとえば手紙や談話のように、その情意を表現する道具であって、少なくとも利益とは縁のないものでなければならぬ。

昨今の文学の墮落の危機は、革命的かそうでないかに関わらず、その営業化にあり、これでは資本主義の泥沼に陥って、二度と這い上がることはできなくなる。

こうした周作人の態度を考えるに、周の批判はあくまで道義的倫理的非難にすぎず、文学理論に踏み込んだ発言であるとは言えない。周作人と郭沫若、当時の文壇との具体的な対立については、今後も更なる検討が必要であろう。

二、日本での面会

このような二人が、一九三四年に日本で顔を合わせることになる。

一九三四年、周作人は日本人妻を伴い、一九一九年以来となる二度目の訪日を果たした。ちょうど大学の夏休み期間中にあたり、二ヶ月近くにわたって日本に滞在することとなった。当時、周作人の同僚で

あるとともに創造社成立期のメンバーでもあった徐祖正（耀辰）も来京中で、周作人訪日の全日程に同行した。この徐祖正が二人を引き合わせたのである。

『周作人日記』(5)は、二人が東京で三度にわたって面会したことを記録している。それによれば、一度目は七月三〇日のことで、「郭沫若君同四女来訪耀辰、共談良久而去（郭沫若君が四女とともに徐耀辰を訪ねて来、しばらく一緒に話をして帰る）」と記されている。

このことについて、郭沫若が七月三一日からの十日間を記録した日記風エッセイ「浪花の十日」に、より詳しい記載がある。郭沫若一家は、夏休みに千葉の浪花村に避暑に行く計画だったものの、当時小学生だった四女の淑子は三一日まで授業があったので、父娘二人だけ遅れて三一日に出発することになっていた。その出発前日の七月三〇日午後、四女を連れて周作人らの滞在していた菊富士ホテルに徐祖正を訪ね、周作人とも言葉を交わしたという。

二度目と三度目の面会については、徐祖正から郭沫若に宛てて、周作人が会いたがっていると伝える手紙が浪花村に届いたという記録が、「浪花の十日」の八月六日の項に見える。

なお、その続きには、周作人に対する不平不満も書き連ねられている。

豈明先生の生活は実に羨ましい。豈明先生は黄帝の子孫でもあり、私も黄帝の子孫だ。豈明先生は天孫民族で、私の妻も天孫民族だ。ところが豈明先生の交遊の相手は文人墨客なのに、私の友人は刑事と憲兵だ。豈明は今江戸に滞在中で、江戸文士の礼遇は甚だ厚く、新聞によく彼を招待した宴会の記事が出ている(6)。

郭沫若は、この頃、蒋介石政権に追われて日本に亡命中であったが、左翼作家への風当たりは日本でも強く、彼は、危険人物として刑事や

憲兵にマークされていた。そのような重苦しい環境への不満が、周作人への不満として噴出したのである。

八月十四日の『周作人日記』には、「转乘电车至市川須和田宅、访郭沫若君、下午回寓已四时（電車を乗り継いで市川市須和田にあった郭沫若宅を訪問、帰宅時すでに午後四時をまわる）」とある。この日周作人がわざわざ郭沫若を訪ねたのは、郭と親交のある文求堂主人田中慶太郎に、洋画家・書家の中村不折を紹介してもらうためであった(7)。周作人、徐祖正と郭沫若の三人は、十七日に文求堂で待ち合わせるこ
となり、郭はすぐに田中宛の手紙を出している(8)。

周作人が中村不折に会いたがったのは、親友の銭玄同が、中村不折や郭沫若らが行っていた漢魏の書・篆刻文字の研究に関心があったためだというのが、実際にそれだけで訪問したとは考えにくい。周作人は、郭沫若の研究分野での活躍や日本における厳しい境遇などをすでに十分承知していたはずで、実は、郭沫若とのそれまでの関係における様々な誤解を解き、あわせて日本文壇の状況について意見交換する必要性を感じたがための訪問だったのではないか。

さて、『周作人日記』八月十七日の項に、「上午同耀辰往文求堂、访田中君未几、郭沫若亦来、同往千駄木町田中宅、即旧森氏观潮楼也。午在大学前鉢の木洋食、田中氏夫妇为主人、下午一时半回寓」（午前耀辰と文求堂に行き、田中君を訪ねたがいなかった。郭沫若も来て一緒に千駄木町の田中宅「すなわち森鴎外の観潮楼なり」に行き、お昼大
学前の洋食屋『鉢の木』で田中夫婦が招待、午後一時半ホテルに戻る）とある。

約束通り、三人は文求堂に到着したものの、田中が不在だったため、郭は二人を千駄木町の田中宅（旧森鴎外宅観潮楼）に案内した。田中は三人を請じ入れて珍藏の書籍などを見せ(9)、昼食を大学近くの洋食屋「鉢の木」にて田中夫妻の招待という形で共にし、歓談したという。田中はさらに、その夜開催された日本詩人会にも周作人らを同行し、

ホテルまで送った上で、早速中村不折に手紙を書いた。そして、翌十八日に周作人を訪問し、二〇日に中村宅を訪問する約束ができたことを伝えている。

このことについて、「浪花の十日」は、徐祖正からの手紙について記録するだけで、その前の七月三〇日の面会や、その後の中村不折とのあれこれについては触れていない。三度の面会を通して、周と郭との間には様々なやりとりがあつたはずだが、二人とも、なぜかその歓談内容を語ろうとはしていない。二人の間にあるこの微妙な空気は、その後の二人の関係と合わせて、さらに考察する必要を感じさせる。

三、二人の変化

二人が日本で会った後、双方の態度が明らかに変化する。とりわけ郭沫若は、以前のような周作人に対する激しい攻撃を控えるようになった。また、周作人の方も、その文章の中で、郭沫若についてしばしば触れるようになった。

一九三五年、周作人は、「科学小品」の冒頭で、郭沫若訳のH.C.Wellsなど著『生命の科学』を商務印書館より贈られたことに触れ、医学生であると同時に優れた業績をあげている文学者でもある郭沫若がこの巨著を翻訳したことは適格であつたと褒めている。

郭沫若は、一九二九年に『生命の科学』の連載を始め、その後火事によって原稿を失ったものの、それでも翻訳を続け、先述の周作人に会った一九三四年に浪花村に滞在していた時にも原稿を執筆中であつた。この時郭が書評を頼んだわけではなかったろうが、周作人はこの翻訳に丁寧な目を通したらしく、具体的な例を挙げながらその価値を評価している。読み応えある名書評と言つてよいだろう。

「科学小品」の後半は、周作人特有の筆致で、自身のお気に入りであるトムソンの「落葉」の一段を訳し、当時の文壇で流行中であつた科学小品と呼ばれる文章について独自の定義を行いつつ、その範例を

示している。これもまた、周作人らしい切れのある文章である。二人の良好な関係が相乗効果を生み、より高いレベルの文学を生み出す素地となつた、まさに好例といえよう。

また、同年に、周作人は郁達夫と二集ずつ編集した『中国新文学大系・散文一集』の中に郭沫若の作品七篇を採録している。そこには、周作人が、郭沫若の文学的才能を高く評価していたことがうかがわれる。前年に日本で面会した時には、この作品集をまさに編集集中だつたわけで、二人がそれについて触れなかったはずはない。

周作人は、他にも、同年発表の「談方姚文」や翌三六年発表の「朴麗子」の中で、郭沫若の歴史小品「孟夫子出妻」に言及している。つまり、周作人は、郁達夫への評価と同様、郭沫若の活躍にも十分注目し、評価していたのである。

このような周作人の郭沫若に対する態度を考える時、周が訪日中に、左翼作家藤森成吉の招待を受けたことにも注目すべきであろう⁽¹⁰⁾。

実は、周は当初、藤森成吉の招待を辞退していた。しかし、その後結局招待を受け入れ、八月二日に藤森の自宅を訪れ、プロレタリア系の作家達と顔を合わせるこゝになつた。ちなみに、その時居合わせたのは、神近市子・徳永直・秋田雨雀・渡辺順三・島田和夫・江口渙らである⁽¹¹⁾。この藤森成吉が、郭沫若の六高時代にドイツ語を教えていた人物であることを考えれば、あるいは、この日の会合で郭沫若の話題が出た可能性もある。

いずれにせよ、周作人には、プロレタリア作家達を完全に拒絶するつもりはなかったに違いない。結局のところ、周の持つヒューマニズム精神や、彼が力を入れた「新しき村運動」の紹介、抑圧や統制に対して断固反対する自由精神を勘案すれば、左翼文学の完全否定など、到底ありえないのである。

一九三七年、郭沫若は家族の反対を押し切り、単身極秘裏に帰国し、抗日運動に身を投じた。それと同時に、周作人に宛てた書簡「国難声

中懷知堂」(12)を公開し、「如可贖身兮，人百其身」などといった郭沫若特有の誇張表現を用いて、周作人に北京脱出を呼びかけている。

陶亢徳の「知堂と鼎堂」(13)によれば、周作人はこの郭沫若の呼びかけに対し、「且感且愧」(感動し、恥じ入る)と返答している。周作人にしてみれば、大家族を抱えての移動は困難なために、北京に残留せざるを得ないという事情があったのである。しかし、周作人が淪陷区において、北京大学文学院長、傀儡政權の教育督弁となるに及び、その後の二人の人生は、明暗を分けることになっていく。

四、晩年の二人

郭沫若一家の生活は、日本亡命中、貧苦を窮めた。そのことは、彼が当時出版社の編集長や友人達に宛てた手紙によってよくわかる。それらの手紙のほとんどは、原稿料の支払いを求める直談判の内容だったからである。

しかし、この時期はまた、彼の生涯において最も多くの業績を上げた時期でもあった。中でも、古代史研究、甲骨文や金石文の研究は最高の評価を受けている。また、歴史小品「冢蹄」や詩劇「漂流三部作」など、いずれもこの時期に書かれたものである。さらには、翻訳や自伝風エッセイまで手がけた。全ては、家族を養うため、原稿料を稼ぐために必死に書かれたものだったのである。

前出の文求堂田中慶太郎宛の書簡も、この時期は生活資金の工面に關する内容が頻出している。田中は、そのような郭沫若の窮状を救うべく、彼の業績を次々に出版した。『石鼓文研究』(一九三三)、『古代銘刻彙考』(一九三三)、『同 続編』(一九三四)、『金文余釈之余』(一九三五)、『西周文辞大系考釈』と『同 図録』(一九三五)などの研究書が文求堂から出版されている。また『我的幼年』、『北伐途次』、『創造十年』、『黒猫与塔』、『黒猫与羔羊』などの自伝風エッセイ、『生命の科学』や『日本短篇小説集』の翻訳などもその時期のものである。

そんな郭沫若の生活は、建国後大きく変化する。抗日活動や共産党との共闘が評価され、政府の要職につくことになったのである。彼は、政務院副総理、中国科学院初代院長、全国文学芸術連合会主席、全人代常務副委員長、日中友好協会名誉会長などを歴任し、文学・史学における指導的役割を果たした。反右派運動以降は、自己批判を行うことで、知識人の思想改造の成功例として、毛沢東に評価され、庇護を受けた。

一方、周作人は、新中国成立後も、「漢姦」の汚名のもと、政治的權利を剥奪され、その晩年は想像を絶する貧苦にあえいだ。

出獄直後は、かつての弟子や友人達の援助を受けて、どうにか北京の自宅で普通の生活を送るようになった。建国当初は、古典ギリシャ文学や日本古典文学の翻訳を命じられ、その翻訳料で大家族を養った。しかし、文革が始まると、翻訳料の支払いが滞り、その生活は困窮の度合いを深めた。晩年には、香港の鮑耀明や曹聚仁、また松枝茂夫など日本の友人らに原稿や本を送り、そのかわりに必要な参考資料や薬、ラードや砂糖など日本の調味料や嗜好品などをもらっている。

そのような困窮生活の中で、周作人はおびただしい量の翻訳を世に送り出した。一九五〇～六〇年代には、『日本狂言選』『石川啄木詩歌集』『古事記』『浮世風呂』『浮世床』『平家物語』『枕草子』『徒然草』『ルキアノス対話集』『全訳イソップ寓言集』『エウリピデス悲劇集』『アリストファネス喜劇集・全三集』など、多くの作品を翻訳、あるいは校訂して出版した。当時すでに七〇歳を越えていたことを考えれば、異常ともいふべきハードワークぶりである。その挙げ句、最終的に尊厳なき最期を遂げた。

周作人は、その晩年に郭沫若について言及したことがある。彼は、鮑耀明から送られた趙聰の『五四文学点滴』を読み、その感想をこう手紙に綴っている。

書中に郭公に対する不敬の表現があるが、これはすでに一般的な世論となっていたものである。(中略)個人的には彼に対して何ら悪感情を抱いているわけでもないが、「創造十年」であのように魯迅を攻撃しておきながら、魯迅の死後は声高に「魯迅は偉大だ」と叫んでいるのを見ると、スターリンを称えて「あなたは鉄だ、あなたは鋼だ」と歌ったのと同じく、感心できることではないように思える(14)。

ここからも、周作人は、郭沫若に対して殊更に悪印象を持っていたわけではない、と述べる。ただし、郭沫若のパフォーマンスぶりや、一貫した主義主張の無さには、賛同しかねるといったところか。とどのつまり、これこそが周作人の郭沫若評価を的確にあらわしたもののなのかもしれない。

注..

- (1) 一九二〇年一月上旬李石岑への手紙に処女と仲人関連の発言がある。そして十四日振鐸宛ての手紙にその言葉への解釈を公開した『時事新報・文学旬刊』第四号
- (2) 小野忍・丸山昇訳『黒猫・創造十年他』(東洋文庫一二六 一九六八年十一月) P二四四
- (3) 周作人『金魚』『青年界』創刊号(一九三二年三月十日) 一九三〇年三月十日執筆
- (4) 周作人『半封信』(一九三〇年四月十七日)『周作人散文全集』(広西師範大学出版社 二〇〇九年四月)
- (5) 『周作人日記』(大象出版社 一九九六年)
- (6) 小野・丸山訳『浪花の十日』『続海潮・帰去来』(東洋文庫一九九 一九七一年十一月) P二三五
- (7) 中見里敬『錢玄同致周作人書簡』について.. 錢玄同、周作人、中村不折の書をめぐる日中文化交流』(九州大学付属図書館研究開発室年報

二〇一八年七月)

- (8) 郭沫若の田中氏への手紙(一九三四年八月十四)『郭沫若書信集』(中国社会科学出版社 一九九二年十二月) P二八六
- (9) 一九三五年に書いた「十竹齋的小摆设」に、周作人は中国で唯一王孝慈氏が所有の原刻珍本『十竹齋箋譜』を田中が持っていることで、彼の自宅で見せてもらったことに触れて、魯迅らが復刻したこの本の価値を語った。
- (10) 岸偉『周作人伝・ある知日派文人の精神史』(ミネルヴァ書房 二〇一一年十一月)
- (11) 『周作人日記』一九三四年八月二日を参照
- (12) 郭沫若『国難声中懷知堂』『逸経・宇宙風・西風・非常時期聯合旬刊』一九三七年八月三〇日)
- (13) 陶亢德『知堂与鼎堂』『古今』半月刊 一九四三年二〇、二二(合訂本)に引用の周作人の手紙
- 赐信均收到。鼎堂相见大可谈，唯下笔时便难免稍过，当作个人癖性看，亦可不必计较，故鄙人私见以为互訐恐不合宜，虑多为小人所窃笑也。偏见必有当，聊表芹献耳。
- 十五日所寄刊物四册于今日收到，至为忻喜，鼎堂先生文章得读，且感且愧，但亦不敢不勉耳。一九三七年十月二五日
- (14) 鲍耀明宛ての手紙『周作人与鲍耀明通信集』(河南大学出版社 二〇〇四年四月) P三五六～三五七
- 书中对于郭公表示不敬，此已渐成为一般的舆论。(省略) 个人对他并无恶感，只看见创造十年上那么的攻击鲁迅，随后鲁迅死后就高呼大哉鲁迅，这与歌颂斯大林，说你是铁，你是鋼，同样的令人不大能够佩服也。
- 一九六四年十月十七日

知堂と鼎堂

劉岸偉

知堂（周作人）と鼎堂（郭沫若）は二人とも近代中国を代表する文人、作家である。先輩、後輩のように日本に留学し、日本人女性を妻に迎え、終生何らかの形で日本に関わっていたなど、共通点も多い。一方、個人の気質、審美的嗜好、帰国後の境遇、経歴などは丸きり違っていただけに、二人の人生曲線が意外にも数回、交叉していたことは、記録に値して興味深い。

一九二八年十二月、魯迅、郁達夫が編集に携わった文学月刊『奔流』第一巻第七号は、トルストイ生誕百年の記念特集が組まれ、記念文章として「小泉八雲のトルストイ論」（侍桁訳）、ゴースキーの「回憶雜記」（郁達夫訳）など七篇の訳文が掲載されていた。第七号の「編集後記」の、あの揶揄皮肉に満ちた文章は、もちろん魯迅の手になるものである。このロシアの文豪については、紹介する者も罵る者もいるけれど、中国における影響など皆無に近い、と文壇、出版界の荒蕪を述べた後、魯迅は次のように書いている。

中国においては彼の著書はかくの如しだが、行為に至っては、なおさら風馬牛の如しである。われわれには、書店を開き、洋館を造る革命の文豪はいるが、田んぼを農夫に分け与える地主はいない。なぜならこれもまた「浅薄なヒューマニズム」であるからだ。われわれには、「出版の自由」を求める店主を兼ねた「著作家」はいるが、手紙で皇帝を直接叱責するばかり者はいない。それは何の役にも立たないからだ。べつに危険を恐れているわけではない。

書店を開き、洋館を造る「革命の文豪」とは、『創造月刊』を牙城に「革命文学論」を振りかざしている「創造社」の諸公を指している。留日学生を主体に一九二二年七月東京で結成されたこのグループは、その初期の主要な顔ぶれ―郭沫若、郁達夫、田漢、王独清、張資平らを一瞥して判るように、かなり浪漫的、耽美主義の色彩に染まり、「直覚」や「自己表現」を強調し、「芸術のための芸術」派と目されていた。ところが、一九二七年四月、蒋介石の反共肅清を境目に、国共間の協力関係は瓦解し、国民革命は不首尾に終わった。この挫折によって、中国の知識人は興奮から幻滅へと激しい心理上の動揺を味わった後、再び苦悶と彷徨の状態に陥ってしまう。「創造社」同人も分化して、この変動をきっかけに、衣替えを果たし、ソ連と日本からの舶来の左翼文芸理論を武器に、「革命文学」の旗揚げをしたのである。

一九二七年十一月、日本の修善寺に滞在していた成仿吾の執筆した「文学革命より革命文学へ」の一文が翌年二月に発行された『創造月刊』第一巻第九号の巻頭を飾った。「資本主義はすでに最後の段階である帝国主義に発展し、全人類社会の改革は目前に迫っている」現状に鑑みて、「われわれの今後の文学運動は、一歩進めて文学革命より革命文学に至るべき」と呼びかけた。そして文章の第四節「文学革命の現段階」において、成仿吾は文学を担う「主体」、文学の「内容」「文体」「ジャンル」の問題点を指摘した後、矛先を一転して、「北京の一部分の特殊現象」をやり玉に挙げた。

これは語絲を中心とする周作人の一派の代物である。彼らのスローガンは「趣味」である。私は以前にこう言ったことがある。彼らが気取ったのは「閑暇、閑暇、三番目もまた閑暇」だ。彼らは有閑のブルジョアと臆腫としているプチブルジョアを代表している。

魯迅の名を挙げなかったものの、「語絲を中心とする周作人の一派」

の一語でも十分に明白だが、「閑暇」云々は明らかに魯迅への当てこすりでもあった。魯迅はさっそく応戦に出て、数週間後の一九二八年三月十二日発行の『語絲』第四卷第十一号に、「酔眼の中の朦朧」を載せた。「創造社」との応酬はその後も続いて、ついに一九二八年八月、『創造月刊』第二卷第一号に、「杜荃」（郭沫若のペンネーム）の文章「文芸戦における封建殘党」が掲載され、魯迅を「二重の反革命の人物」と断じて批判の調子をエスカレートさせた。

その頃、周作人は日本人の漢字新聞『順天時報』を相手に、一連の「他人や社会の怨みを買うような」時局批判の筆をとっており、いわゆる「革命文学論争」には加わっていなかったが、プライベートの書簡では、「革命文学者」諸公に対して皮肉を漏らしていた。魯迅の「酔眼の中の朦朧」が『語絲』誌に発表された約半月後の三月二十七日、友人江紹原に宛てた手紙において、周作人は「無産階級」についての江紹原の所感に触れて、「階級」の存在を認めながらも、資産の有無で区分するのではなく、その思想を見るべきだと主張、なにしろ「多くの無産友人の思想は、全く有産階級のものだ」と述べている。しかも「非有産思想」の持ち主は寥寥としているのに対して、「有産思想者」は滔々として天下に満ちており、「討赤の諸帥、諸同志」（張作霖と蒋介石を指す）とともに、自称無産階級の「革命文学者」ら、成仿吾の如きはみなそうであるという（『周作人早年佚聞箋注』四川文艺出版社、一九九二年参照）。また一九二八年二月、その時局批判の文章を一冊にまとめた『談虎集』（下冊）が上海北新書局から刊行された際、その「後記」において、周作人は「私はこの教派やあの学派の門徒ではなく、守るべき一言もない」として、群衆を信用せず、無産政党や無政府主義者の同伴者にはなれない、思想の統一に与しないことを述べて、革命派である「創造社」と一線を画している。ただかつての同人に対して、個別的には例えば郁達夫とは仲が良かったし、郭沫若に対しても悪い感情を持っていなかった。一九二七年五月三十日に書いた、エ

ッセイ「藁深先生に答える」（六月十一日『語絲』）に発表では、健全なる思想をもつ詩人のことが好きだとして、「数年前に郭沫若先生が、詩人は人類学に通曉すべきだと言ったが、私は今でもそれが正しい思っている」と周作人はいう。

その後、時代の変転により、周作人と郭沫若はそれぞれの道を行んでいたが、ある偶然の機会で知堂と鼎堂は思わぬ対面を果たし、お互いに忘れたい思い出となった。

一九三四年七月十一日、周作人は妻の羽太信子、息子の豊一、甥の豊三とともに大阪商船の「長城丸」に乗り込み、日本へ向かった。十五日の早朝七時に神戸港に到着、十二時半、三ノ宮で急行に乗り、夜の九時頃東京に着いた。一九一九年妻子との帰省以来、十五年ぶりの日本再訪である。東京に留学した二十代の頃や北京大学に就職したばかりの十五年前とは違って、今の周作人はすでに「天命を知る」年をむかえ、中国の文壇で押しも押されぬ著名作家となったのである。年齢と境遇の変化によって、旧遊の地を再び訪れる感慨もひとしおであろう。

妻子の帰省に同行した私的な滞在とはいえ、周作人の訪日は各方面の注目を浴びた。滞在中の日記を見ると、日華学会、外務省、東方文化研究所、中国文学研究会などを訪問、来客の応対や宴会などが連日に記され、朝日新聞、読売新聞、中央公論社、改造社などメディアのインタビュ、取材もたびたびあった。

周作人の東京滞在中、亡命中の郭沫若との思いがけない邂逅は両方にとっても多少なりともドラマティックなものであった。七月三十日の日記には、「郭沫若君がその四女と耀辰（祖正）を訪ねてくる。共に長く語り合って去っていく」とある。この初対面の印象が意に合ったらしく、周作人の方からまた会いたいという気持を徐祖正に頼んで伝えてもらった。八月十四日、周作人は電車に乗って市川須和田二六七にある郭沫若宅を訪ねた。「午後宿に戻ってすでに四時」になった

という。そして三日後の八月十七日、千駄木町の田中宅、つまり旧時の森陽外の観潮楼を訪ねた時、郭沫若も来ていた。時下の周作人は日本の文壇学界にもてはやされる上座の客であるのに対して、郭沫若は難を逃れて異邦に身を寄せる亡命者である。この境遇の懸隔を感じ取り、人一倍勝ち気な郭沫若は日記の中で、自分の感触を次のように書き記していた。

豈明先生(周作人)の生活は、実に羨ましい。豈明先生は黄帝の子孫であるが、私もまた黄帝の子孫である。豈明夫人は天孫人種であるが、私の夫人もまた天孫人種である。豈明先生の交遊するものは騷人墨客であるが、私の朋友は刑事や憲兵である。豈明はこの頃江戸に滞在している。江戸の文士は礼遇すること甚だ慇懃で、新聞には時々宴会や招待の記事がある。(「浪花十日」)

かつて無遠慮に「語絲派」を批評した郭沫若だが、おそらく異郷索居の侘びしさは故旧に逢う喜びを引き立て、周作人との距離感を縮めたように思われる。一方、後日陶亢徳に宛てた手紙の中で、周作人は自分の所感をこう伝えた。「鼎堂に会って、大いに談るべし。唯ものを書く、と、どうやら行き過ぎになりがちだ。個人の性癖として見れば、亦あまりこだわらなくてもよい」。

それよりまた数年の歳月が流れ、日中関係はこれまでになく悪化して、ついには一九三七年七月、全面戦争となった。情勢の急変により、北平市内にも慌ただしい動きがあった。国府の軍政機関がすでに退去し、北京大学、清華大学も南遷することに決まった。八月九日、北大文学院長胡適は、教授葉公超、梁実秋らと一緒に北平を立ち去った。その三日前に、周作人は『宇宙風』の編集者陶亢徳に宛てた手紙の中で自らの去就について次のように書いている。

十日ほどご無沙汰しているうちに、時勢はすっかり変わってしまいました。拙宅には家族が多く、実をいうと、避難に行けそうところもないから、故に苦住するしかないので。幸いなことに、私は無事です。これから何卒ご安心下さい。これからはどうすればよいか、まだ決められません。……南に帰るのも北に留まるのもどちらも難儀なので暫く将来の情勢を見て判断するより仕方がないと思います。(八月六日)

かなり以前から古都での「苦住」を覚悟していたとはいえ、事態の進展は周作人の予想をはるかに超えていた。同僚友人の避難脱出が相次ぐ中で、周作人も動揺した。後年ギリシア文学翻訳家となった羅念生の記憶によれば、盧溝橋事件の後、ある日、東城沙灘にある北京大学の紅樓で周作人に遇った。「彼も南下の交通事情を尋ねている模様で、南方へ行きたいのだが、家事が足手まといとなつて、最終的な決断をしていない、と私に話した」という(「古代ギリシア戯曲を翻訳する周啓明」『苦雨齋主』所収、東方出版センター)。当時北平八道湾の周宅には、周作人一家と建人の残した妻子がともに暮らしており、西三条には、母親の魯瑞と魯迅前妻の朱安が住んでいた。十人を超える大所帯を考えると、「係累」(家族の世話)が重すぎることは、強ち口実とは思えないが、南下を躊躇っていた理由はほかにもあったらしい。旧友の鄭振鐸は戦争終結後、「周作人を惜しむ」という一文の中でこんな証言を残している。

「七・七」以後、私たち南方にいた友人らは、みな彼のことを念じて心配していた。多くの人が彼に南下するようにと勧めたが、彼がいうには、魯迅の「徒党」が彼に不利なまねをしでかしかねないから来れないという。これは全くでっち上げの口実である。

魯迅没後も続いた、左翼陣営との応酬を考えると、周作人の憂慮は「全くのでつち上げ」でもなかったように思われる。だが、南方にいた友人たちの心配と期待は真心をこめたものであった。事変勃発から約二ヶ月後の八月三十日に出た『逸経・宇宙風・西風・非常時期連合旬刊』には、密かに日本を脱出した郭沫若の短文「国難の声の中で知堂を懐う」が掲載された。作者特有の誇張もあるが、「敵の重囲にいる知堂」の安否を想い、周氏を推重する厚意が行間に溢れている。

「如し贖ふ可くんば人其の身を百にせん」(身代わりになれるなら百度でも死のうというが、知堂はもしも本当に南へ飛んで来られるなら、私のような人間は、彼の身代わりに、何千何百人死んだとしても大したことではない。

思うに、三年前の邂逅で二人の間の誤解、疑念などがさりと氷解したからこそ、この「知堂を懐う」一文が生まれたのであろう。

この短文は後に数冊の雑誌とともに、陶亢徳によって周作人のもとに送られてきた。十月二十五日付の返信の礼状には、こんな文面が見える。

「十五日に送った雑誌四冊は今日頂き、欣喜の至りです。鼎堂先生の一文を拝読し、感激と同時に恐縮です。それに自ら励まないわけには参りません。」(陶亢徳「知堂と鼎堂」に収録『古今』)

一九五〇年代初期から、北京に蟄居している周作人は時々北京や香港の雑誌に売文して生計を立てていた。故人故事などは恰好の題材である。人間の記憶は、ふだん、雑物がごたまぜに詰め込まれた引き出しのようなもので、玉一粒を見つけて、引っ張り出すと、数珠が出てくる時もある。晩年の周作人がたまたま旧い雑誌や故紙を整理していたら、故人郁達夫の手紙が出てきた。黄ばんだ封筒に溜まっていた埃を払い落とすとともに、数十年前の記憶も蘇る。

郁達夫を除けば、創造社においては、知合いはほかに一人もいなか

った。もともと徐耀辰、陶晶孫の諸君もいたが、彼らはどうやらつかず離れずというような感じで、後に創造社を離脱したらしい。達夫も最後までとどまらなかった。しかし当初は社内で活発に活動したメンバーだった。彼の批評文は筆鋒がもっとも鋭く、攻撃も容赦しなかったように覚えている。ところが、彼に対しては、とても慣れ親しんでいるような気がして、長年の古い友人のような感覚をもっている。とはいえ実際、私と彼との交際はさほど多くはなく、一九二三年彼が北京へ来た時に数回会ったに過ぎない。その後、彼が上海、杭州にいた頃何度か文通しただけであった。酒飲みや漢詩作りができないから、彼との交わりを深める機会がなかった。しかし私たちはお互いによく知っているような気がする。(「郁達夫の書簡」香港『新晚報』1963.9.26)

郁達夫は、近代中国においていわば才子肌の小説家である。詩人の感傷、内面の独白に彩られる自伝風な作品は、閉鎖的で、混濁していた時代の空気に清新な息吹を吹き入れ、若い男女の心を躍らせた。周兄弟より数年も遅く大正二年に來日し、一高特設予科、八高を経て、東京帝大の経済学部に進んだ。郭沫若ら留学生仲間と文学団体の創造社を東京で結成したのは、一九二一年七月、帰国直前であった。

上述したように、一九三四年の夏、東京を十数年ぶりに訪れた際、周作人は徐耀辰のとりもちで亡命中の郭沫若に会って「共に長く語り合った」のである。お互いに好印象を持っていたようだが、それ以上交際が続かなかった。この懐旧の短文を執筆した際、すでに中共の高層幹部になった郭沫若を「知合い」に数えなかったのは、世事の変転による二人の運命があまりにもかけ離れていたからであろうか。知堂の胸中を推し測って思わず悄然となる。

(補記 この小文を草するにあたって、旧著『小泉八雲と近代中国』、『周作人伝』などの内容を一部再録したことをここに付記しておく。)

三十年の因縁をめぐる周作人の「懐の深さ」

武 継平

盧溝橋事変勃発まで、周作人は「五四」新文化運動の主将の一人としても新文学の先駆的な実践者としても中国文学界の長老級重鎮だった。その名声と人望は兄魯迅を超える時もあった。

周氏兄弟は性格がかなり異なっていた。「出る杭は打たれる」とよくいうが、文学者は有名になれば不愉快な応酬は免れない。その面で魯迅は目には目をで終始一貫しているし、しかも容赦など全くない。

対して周作人は性格が温和で、文士間の付き合いはいつも控えめで臨み、必要以上なことは絶対言わないくらい口数が少なかった。いかなる場合においても、「海、百の川を納め、容の大きい有り」といった大物の懐の深さを見せている。文芸論戦といい、異見の主張といい、論争しているうちに激昂となり、ついつい攻撃的になって互いに傷つけしめることはよくあるが、周作人の場合は守るべき鉄則があるのか、できれば人と論争しないか沈黙を守るかのどちらかだった。このような言葉の少なさがバリアとなって彼をつまらぬ人身攻撃から守ってくれた。それだけではなく、大物有名人に噛みつくことで自分も有名になりたがっている「身の程知らず」の文壇の若僧たちの野望を木っ端みじんに砕いたのである。

当時文学界の応酬戦といえは、魯迅と郭沫若をはじめとする創造社同人たちの「絡み合い」が有名だ。郭は一九二八年に「杜荃」という筆名で『文芸戦線上的封建余孽』を発表し、魯迅を「資本主義以前の封建的残党」や「二重的な反革命の人物」で「失意の Fascist・ファシスト」（『創造月刊』21）と思い切り罵倒して殴り込みをかけた。

だが、魯迅は一步も引き下がらず、郭沫若、郁達夫、陳仿吾のような帝大出身の創造社同人を「才子+ゴロツキだ」（『上海文芸の一瞥』1931）と逆ねじを食わした。魯迅が病没するまで二人はついに会ったことがなかったが、文壇の宿敵というか、最後まで譲り合うことはできなかった。

史料『周作人日記』（大象出版社1996）、『浪花十日』（『郭沫若全集』文学編13巻、人民文学出版社1992）および『郭沫若致文求堂書簡』（文物出版社1997）によれば、日本亡命期の郭沫若は周作人に三回会ったことがある。一回目は一九三四年七月三十日、郭沫若が四女淑禹を連れて東京訪問中の周作人に会いに行った。招かれて行ったと見てよからう。北京大学教授徐祖正も同席していた。周作人日記には「長い時間歓談し、その後帰った」と記してある。会見は和気藹々なムードで行われたのであろう。翌八月六日に徐祖正からまた手紙が来て、「豈明先生が会いたい」という。家族と海水浴に来ていたので帰宅するのは十日以降になる、と郭沫若はざくばらんに返事をした。その返事が八月十四日にあつた二回目の会見を成就させたのである。今回周作人と徐祖正の二人はわざわざ東京から千葉の市川にある郭沫若の自宅を訪れた。三回目の会見は八月十七日、場所は文求堂だった。郭沫若は文求堂店主田中慶太郎氏を周徐二氏に紹介し、その後文豪森鷗外の旧居である観潮楼を案内した。

郭沫若と周作人との間に起きた個人的なイザコザといえは、これから触れる二つの出来事を指すのが一般的だが、どれも周作人が郭沫若の憤慨や皮肉を無視したことで当時は事なきを得たのである。最初の不愉快は作者名の順位に起因していた。郭沫若の自伝『離滬之前』が『現代』に連載されることになり、初回掲載の目次のグラが送られてきて、周作人の『苦茶隨筆』が自分の作品の前に版組みされているのを見て一瞬頭に血が昇り、編集部にただちに連載を中止せよと不満をぶつけた。その後編集部が慌てて釈明を繰り返し、雑誌刊行時にかな

らず『離滬之前』を『苦茶隨筆』の前に組む約束をしたことで郭の怒りは収まった。郭沫若のこうした態度に対して周作人は何の反応も示さなかった。結局、関係者から見れば、周作人の存在感が一層大きくなり、郭沫若のわがままと苛立ちが余計に目立ったのである。この作品の掲載順位をめぐる争いに関する史料は掲載誌側の当事者だった施蟄存が書いた『郭沫若的(争座位帖)』（施蟄存回想記『沙上的脚跡』遼寧教育出版社1995）に詳しい。

周作人に対する郭沫若の二回目の怒りの爆発は一九三四年七月にまたも起こった。周作人が妻子を連れて日本を訪問し、日本文学界のハイレベルな歓迎を受けたのを「新聞紙に載る招宴の記事」で知り、郭沫若は胸中の妬みを八月六日の日記に綴り、『浪花十日』と題して原稿を月刊誌『文学』に送った。わずか一週間前に周作人と仲睦まじく歓談していた郭沫若の笑顔を彷彿させるが、この時に現れたのは明らかに彼の素直な顔であろう。

郭はこう書く。「豈明先生の生活は実に羨ましい限りだ。豈明先生は黄帝の子孫であり、われもまた黄帝の子孫だ。豈明ご夫人は天孫人種であり、わが夫人も天孫人種である。しかるに豈明先生の交遊相手は風雅なる墨客であるが、わが友は刑事や憲兵である」と。

郭沫若が言った「風雅なる墨客」は一体誰のことか。気になる。これも調べてわかったのだが、八月四日に東京日比谷の中華料理屋「山水楼」にて「周作人・徐祖正歓迎会」が「中国文学研究会」の主催で開かれ、会場に顔を出したのは、佐藤春夫、与謝野鉄幹、有島生馬、新居格（司会）、島崎藤村（代表挨拶）、戸川秋骨、堀口大学および漢学者塩谷温博士といった文学界および中国文学研究界の大物たちの勢ぞろいである。周作人も期待以上面目をほどこしたに違いないが、一方、常に厳しい監視下に置かれ、どこに行っても警察や憲兵に尾行される郭沫若が、我が身を顧みて複雑な心情を「江戸の文士の礼遇を

受け」人生の絶好調期にいる周作人に当たったのも一種の苛立ちまたは焦りによる行動であつたかもしれない。

『浪花十日』が月刊誌『文学』（5-1）に発表されるのは翌一九三五年七月だった。それまでのおよそ一年間、周作人は何事もなかったように振る舞い、郭沫若の一方的な絡みをいつもと同じように無視し続けた。

ところが、二十世紀前半、まさに激動した中国には変わらぬものはなかった。一九四五年日本敗戦後、同じ文士である郭沫若と周作人の二人は社会的地位がおおきく逆転した。亡命者でありずっと貧乏の泥沼から抜けることができなかった郭沫若は、魯迅死後、中国文化界のトップになり、周作人は売国奴の漢奸として断罪され、十四年間の実刑判決を言い渡されて投獄された。共産党政権誕生後、獄中生活を免れたものの、病歿するまで一人の文学者として創作の自由を完全に剥奪され、文化界から疎遠にされた人生敗北者の生存状態であつた。

北京で余生を寂しく送っていた周作人は五十年代から香港にいる翻訳者鮑耀明氏と文通し始めた。一九六六年この世を去るまで鮑氏には手紙を四〇二通（鮑からは三九九通をもらった）送った。最近暇つぶしに『周作人鮑耀明通信集』（鮑耀明編 河南大学出版社二〇〇四年）^①を読み始め、郭沫若の嘗ての無礼をノーコメントを貰いたはずの周作人が、胸に溜まった不満を晩年になって思い切り噴出させているのを見て目を疑った。でも、あれだけ散々悪口を言われても、よく三十年も我慢できたな、と思った。感心すると同時に次のように思わずにはいられなかった。「八股文をいうなら、郭先生の右に出るものはいない」といった後味が悪い皮肉といい、「恥知らずのナンバーワン」といった痛烈な罵倒といい、ひどい言葉は他人の口を借りているとはいえ、北京大学教授時代の周作人の風貌はどこへ消えてしまったのだろうか。というよりもまるで別人のようである。ある種のペーソスを感じ

る一方、周作人の普段見られないヒューマニティーを見てしまったような気もしたのだった。

最後に、周作人が何十年も守り続けてきた「構え」をみずから崩した言動を窺わせる二通の手紙を訳して小文の筆を擱きたい。

(1)

耀明兄…

二十一日付のお手紙は拝読。食用油を送ってもらったばかりですが、また砂糖を送って下さったとのこと、ほんとうに感謝に堪えません。「トクホン」はこれまで十枚届きました。あなたの溥儀論はなかなか当を得たものですね。彼は苦勞を重ねてやっと八股文の専門家になり、気が利く応制文（即ち『我が半生』）も書けるようになりました。しかし聞くところによれば、それには作家協会の誰かが手を貸したということですが、同族の老舎さんの助力だという人もいます。そもそも八股文をいうなら、郭先生の右に出るものはいないと言えましょう。でも今回の件に関してはあまり力にならなかったでしょう。北京は三伏中（酷暑の時期）にあるが、意外と涼しいです。朝ならだいたい摂氏二十七度しかない。雨が多いからでしょう。朝ならだいた

末筆ながら、ご健康をお祈りします。

七月二十八日 作人啓

(2)

耀明兄…

昨日『五四文壇点滴』（訳注…趙聰著文壇裏話、香港友聯出版社一九六四年六月出版）を受け取りました。ありがとうございます。十中八九は読みました。だいたい忠実で公平だと言ってもいいでしょう。ここまで書くのもなかなか容易なことではない。わたしと魯迅の問題に関しては、それもまた事実とさほど違わない。当初かれに二度と私たちの庭に入ってほしくないからあの書置きを渡したのです。でも、文中には

誤解もあった。魯迅日記の原文「招重久」の下には、「案乃一日人（日本人である）」という作者の五文字の注があります。それは間違っています（全く無関係の日本人ではない）。じつを言うと、その人はわたくしの義理の弟で、魯迅日記の中ではよく言及されています。例えば甲寅日記四月九日と十一日に書かれた「羽太重久の手紙を受け取る」というのが証拠の一つです。本の中では郭さんに対する不敬はもはや一般的な与論になっています。ある中学校の教師によれば、今の大学生や中学生の間ではこんなふうに言われているそうです。北京には恥知らずが四人いる。ナンバーズリーとナンバーフォーのことは知らないが、ナンバーワンは彼だ。ナンバーツーは老舎です。巷の噂にすぎず、一撃を博すのみです。わたくしは、個人的には彼には嫌悪感はありませんが、ただ『創造十年』であれだけ魯迅を攻撃していたにもかかわらず、魯迅死後直ちに「大哉、魯迅」と声高らかに叫び始めたでしょう。あれは「あなたは鉄だ！あなたは鋼だ！」という、スターリンを讃えたものと同じで、感心できませんね。偉そうなことを申しました、決して口外されませんように。

末筆ながら、ご健康をお祈りします。

十月十七日 作人頓首

注…『周作人鮑耀明通信集』を出版した河南大学出版社は著作権侵害ということで二〇〇五年周作人の遺族十二名から北京海淀区人民法院に提訴された。同年十一月十日、「出版印行を差し止め、『光明日報』に謝罪声明を発表し、原告側に二万九千八百五十元の賠償金を支払え」との判決が出た。

一九三四年夏、周作人・郭沫若面会の背景

—— 錢玄同致周作人書簡を手掛かりとして

中里見 敬

周作人は一九三四年七月から八月にかけて日本を訪問し、日本の文壇や学界の関係者から大きな歓迎を受けた。このときの訪日で周作人は、当時亡命中だった郭沫若と初めて面会している。郭沫若の研究者には知られた事実であろう^①。小稿では、最近新たに見つかった「錢玄同致周作人書簡」を手掛かりに、田中慶太郎・中村不折という日本人を加えて、一九三四年夏の二人の面会の背景を述べてみたい。なお本稿は、拙稿「濱文庫新収資料「錢玄同致周作人書簡」について」・錢玄同、周作人、中村不折の書をめぐる日中文化交流」(『九州大学附属図書館研究開発室年報』二〇一七／二〇一八)の一部を再構成したものであり、資料はかなりの部分が重複することをお許しいただきたい。

一、錢玄同と中村不折の筆

昨年、九州大学附属図書館濱文庫に濱一衛先生のご遺族より「錢玄同致周作人書簡」が寄贈された。この書簡は一九三九年八月に周作人から、かつて自宅に寄宿していた留学生の濱一衛(中国演劇研究者、のち九州大学教授)に贈られたものであった。その全文は以下のとおりである。

名齋再白專齋。足下用中村氏筆、初始作書、固甚苦艱澁。此信即其鍊證也。但弟敢信、用之純熟以後、必有得心應手之快感、此可斷言者。彼時若偽作漢晉書影、私謂必勝于某君之陶詩卷子也。錢玄同又白。 「疑／古」印

〔名齋(錢玄同の書齋名)^②より專齋(周作人の書齋名)に再呈申し上げます。初めて中村不折の筆で書を作りました。大変に苦労しました。この書簡がその証拠です。しかし私が思うには、この筆に熟練した後には、きっと思いのままに筆をあやつる快感を得られるであろうと断言できます。そのときにもし漢晋の書影を偽作すれば、きっと某君の陶詩卷子にまさることでしょう。錢玄同再呈。 「疑／古」印〕

一九三一年三月二日の『錢玄同日記』に、「前托肩明购中村不折筆、昨日送来。写魏晉字大佳。」〔以前、周作人に購入を依頼していた中村不折の筆が、昨日届いた。魏晉の字を書くのにきわめてよい。〕^③とあることから、この書簡は周作人に依頼していた中村不折の筆を錢玄同が入手したことの礼状であることがわかる。西洋画家としてフランス留学の経験もある中村不折は、書家・収集家としても有名で、とくに北派の書に傾倒していた。一方、錢玄同も日本留学中の一九〇九年に康有為『廣藝舟雙楫』を読んで以来、雄渾な北朝の隸書や章草を臨模しており、文字学者・言語学者と同時に、書家としても知られていた。

一九〇八年に東京の麹町富士見町で筆匠平安堂を創業した岡田久次郎は、「街中でふと目にした中村不折の看板文字に心を動かされ」、「試作筆を持って初めて不折を訪ね試筆を願ひ出たところ、非常に賞賛を受け、先生用の用筆を販売する御許しを受け」、「銘を「龍眠」と命名」して販売していた^④。錢玄同が周作人をとおして入手したのは、この中村不折の「龍眠」筆だったのである。

中村不折は書の収集家として、一九一四年に「草書經三卷」を文求堂から購入したのを皮切りに、王樹枏(一八五二〜一九三六、新疆布政使)旧蔵品をはじめとする写経コレクションの多くを田中慶太郎の文求堂を通して購入している^⑤。自ら収集した墨跡を『禹域出土墨宝書法源流考』(東京：西東書房、一九二七)として出版しただけでなく、平凡社が一九三〇〜三三年に出版した『書道全集』全二十七巻では、

「掲載された名品中、中国のものについてはその多くが中村不折のコレクション」であり、「不折は、まずは図版での公開という形で自らの収蔵品を披露した」のである^⑥。銭玄同はこうした出版物をとおして中村不折を知ったのであろう。

二、郭沫若と田中慶太郎、中村不折

一方、日本に亡命中の郭沫若に対して、田中慶太郎が惜しみない援助を与えたことはよく知られている。この時期、郭沫若は中国古代史、甲骨文の研究に没頭し、『岡周金文辞大系』(一九三三)から『殷契粹編』(一九三七)に至る多くの著書を田中の文求堂書店より刊行した。その際、郭沫若は収集家の中村不折から資料面で多大な恩恵を受けている^⑦。郭沫若が田中慶太郎に宛てた書簡を整理した『郭沫若致文求堂書簡』によると、郭は田中宛の書簡において不折に十七回言及している。とくに、田中の仲介で中村不折から資料を借りたことのお礼や、文求堂から刊行した自著を不折に寄贈するよう田中に依頼する書簡の多いことが注目される^⑧。

このように郭沫若の日本での活動は、田中慶太郎を中心とした人的ネットワークに支えられており、中村不折もその中にいたのである。

三、一九三四年夏、周作人と郭沫若の面会

では、周作人・郭沫若面会の状況を日記や書簡といった資料から再現してみよう。

七月三十日、郭沫若が周作人を訪問する。

郭沫若君同其四女来訪耀辰、共談良久而去。

〔郭沫若君が四女といっしよに徐祖正(字は耀辰)を訪ねて来た。ともにしばらく歓談してから帰っていった。〕

〔周作人日記〕大象出版社、一九九六、下冊六五四頁)

八月十四日、周作人が市川の郭沫若宅を訪問する。

乗電車至市川須和田二六七、訪郭沫若君。下午回寓、已四時。
〔電車に乗って市川須和田二六七に行き、郭沫若君を訪問する。午後、寓所に戻ると、もう四時であった。〕

〔周作人日記〕下冊六六二頁)

郭沫若はその日のうちに田中慶太郎に手紙を書いて、周作人が田中慶太郎および中村不折との面会を希望していることを伝えた。

逕啓者、今日周作人、徐祖正兩先生來訪、談及尊處、頗願識荊、囑爲介紹。擬於十七日午前奉訪、并欲瞻仰觀潮樓、不識尊便如何。又兩君欲訪中村不折翁、兄臺如能介紹、尤所至禱。周、徐二君現寓本郷菊坂町八十二、菊富士ホテル。／賜覆如逕交彼處、實叨德便。／沫若 八月十四日／子祥尊兄

〔拝啓 本日、周作人・徐祖正の両先生が来られて、先生のこと話に話が及び、ぜひお目にかかりたいので、紹介するよう頼まれました。十七日午前にお伺いし、あわせて観潮楼を参観したいのですが、先生のご都合はいかがでしょうか。また両君は中村不折翁を訪問したいとのことですが、先生よりご紹介いただければ、幸甚に存じます。周・徐二君は現在、本郷菊坂町八十二の菊富士ホテルに宿泊しています。／直接そちらにご返事賜れば、大変好都合に存じます。／沫若 八月十四日／子祥尊兄〕

〔郭沫若致文求堂書簡〕二九九頁。〽は改行、以下同じ。〕

八月十七日、周作人と郭沫若が田中慶太郎宅を訪問する。

上午同耀辰往文求堂訪田中君、未幾郭沫若君正来、同往千駄木町田中宅、即舊森氏观潮楼也。午在大学前鉢の木洋食。田中氏夫婦为主人。下午一時半回寓。

〔午前、徐祖正とともに文求堂へ田中慶太郎を訪ねる。ほどなくして郭沫若君がちょうど来たので、いっしよに千駄木町の田中宅へ行く。もと森隲外の観潮楼であつた邸宅である〔補注。昼は大学前の鉢の木で洋食。田中夫妻が主人となる。午後一時半、寓所に

戻る。

『周作人日記』下冊六六三頁

翌日、郭沫若是田中慶太郎にお礼の手紙をしたためた。

昨日偕周、徐二君奉訪、多蒙懇意招待、歸時更蒙嫂夫人送至御茶水、感激感激。(中略)專此鳴謝、即頌／暑安／郭沫若頓首 八月十八日

〔昨日、周・徐二君を連れてお邪魔し、心のこもったご招待にあずかり、さらには帰り際には奥様に御茶の水までお送りいただき、感激に堪えません。(中略)ここに鳴謝いたします。敬具／郭沫若頓首 八月十八日〕

『郭沫若致文求堂書簡』二九九頁

さらに、八月二十四日付けはがきの追伸でも、郭は田中へ日本語でお礼を述べている。

(前略)沫若 八月二十四日／周徐両氏に色々御盡力して下さい、御禮申し上げます。

『郭沫若致文求堂書簡』一六六頁

八月十八日、周作人が文求堂へ行き、中村不折との面会の約束を取る。

上午田中君来訪、即同往文求堂、約二十日下午往訪中村不折君。

〔午前、田中慶太郎君が来て、ともに文求堂へ行く。二十日午後、中村不折君を訪問する約束をとる。〕

『周作人日記』下冊六六四頁

八月二十日、周作人が中村不折宅を訪問する。

下午三時田中君来、与耀辰同至上根岸一二五訪中村不折君、观所收藏、以所印汉魏写经一帖见赠。五时歸。(中略)汉魏写经影本中村君贈。

〔午後三時に田中君が来る。徐祖正とともに上根岸一二五番地の中村不折君を訪ねる。收藏品を鑑賞し、刊印した漢魏写経一帖を贈られる。五時に帰る。(中略)漢魏写経影印本 中村君の寄贈〕

『周作人日記』下冊六六四～六六五頁

以上の経緯から、八月十四日に周作人が持ち出した中村不折との面

会希望は、郭沫若と田中慶太郎の尽力によって実現したことがわかる。九月五日、帰国した周作人を、錢玄同が訪問する。

玄同来談、贈账笔一支、十時半去。

錢玄同が来て話す。頼まれていた筆を一本贈る。十時半に帰る。〕

(周作人日記下冊六七二頁)

晚访启明、他是二号回平也、他在东京访过中村不折及郭鼎堂也、晚十時半归。

〔夜、周作人を訪問。二日に北平に帰ってきたとのこと。東京で中村不折と郭沫若を訪問したという。夜十時半に帰る。〕

『錢玄同日記』下一〇三六頁、第九冊五二七〇頁

四、小結

劉岸偉がいうように、二ヶ月に及ぶ「周作人の訪日は各方面の注目を浴びた」。「日華学会、外務省、東方文化研究所、中国文学研究会などを訪ね」、「朝日新聞、読売新聞、中央公論社、改造社などメディアのインタビュ、取材もたびたびあった」^⑨。だが、二ヶ月ぶりの再会で夜十時半まで語り合った周作人と錢玄同の間で話題に上り、日記に記されたのは、佐藤春夫・島崎藤村ら文豪たちとの宴席ではなく、中村不折・郭沫若との面会であった。

周作人自身がどれだけ中村不折やその書に深い関心を抱いていたかは不明である。しかし、三年前には不折の筆を錢玄同のために取り寄せてやったこともある周作人は、訪日の多忙な日程を割いて中村不折と面会した。そして、帰国するやまずそのことを錢玄同に語り、さらにまた不折の筆をお土産として渡したのである。

最後に、郭沫若の古文字学に対する見識を称讃する『錢玄同日記』一九三〇年十一月十九日の記述を引用しておく。

近来每于晚间卧榻上看郭氏书、觉其见识实超卓、治甲、金文字当以此为正路。我之目的虽与彼不同、彼重历史、我看文字、但治文字、

亦非具此眼光不可也。

「最近いつも夜はベッドで郭沫若の本を読んでいる。見識は卓絶で、甲骨文・金文を研究するには、まさにこれが王道だと思う。私の目的は彼とは違って、彼は歴史に、私は文字に関心があるけれども、文字を研究するには、こうした識見が不可欠である。」

『錢玄同日記』中七七二頁、第七冊三八八頁

一九三四年夏の周作人・郭沫若面会、および周作人の中村不折訪問の背景には、こうした書をととした錢玄同の郭沫若・中村不折に対する敬意があり、それが親友である周作人の行動につながったと言える。また一連の行動から、周作人の知的関心の旺盛さと幅広さ、律儀で誠実な人付き合いの姿勢を窺い知ることができるように思う。

注

- ① 『郭沫若全集』文学編第十三卷「革命春秋（沫若自伝・第三卷）」（北京：人民文学出版社、一九九二）三五九～三六一、三九二頁。日本語訳は小野忍、丸山昇訳『続海濤集・帰去来・郭沫若自伝』（東京：平凡社、一九七二）九〇～九一、一三五頁。ほかに、齊藤孝治『シュトゥルム・ウント・ドランク編集出版委員会、二〇〇五』五七三～五七九頁。成家徹郎「郭沫若と文求堂田中慶太郎・交流の軌跡」『人文科学』十五、大東文化大学人文科学研究所、二〇一〇（二〇一〇）三四頁にも齊藤著を引く。劉岸偉「周作人伝」ある知日派文人の精神史（ミネルヴァ書房、二〇一〇）二二五～二六頁など参照。

② 「名倉」について、前稿では「不詳、錢玄同の書齋名か」と記した。その後、北京新文化運動紀念館所蔵の周作人致錢玄同書簡（一九三〇年十二月二十五日）に、「名倉足下」と記されていることを、中山大学（珠海）の陳潔先生よりご教示いただいた。この書簡は同館所蔵書信叢書に収録され、出版予定だという。

③ 北京魯迅博物館編『錢玄同日記』（影印本）（福州：福建教育出版社、二〇〇二）第八卷三九一頁。楊天石主編『錢玄同日記』（整理本）（北京：北京大学出版社、二〇一四）中冊七九一頁。

④ 「平安堂の歴史」。「筆匠平安堂」ウェブサイトによる。二〇一八年十月六日確認。<http://www.sho-heiandou.co.jp/history/>

⑤ 鍋島稲子「不折旧蔵写経類コレクションについて」（磯部彰編集『中村不折旧蔵萬城墨書集成・台東区立書道博物館所蔵』東京：二玄社、二〇〇五）三五七～三五八頁参照。

⑥ 鍋島稲子「逸脱と回帰の弁証法・中村不折を通して見た一九三〇年代の書壇」（『クラシックモダン』東京：セリカ書房、二〇〇四）一九三頁。

⑦ 松宮貴之「民国抗日戦争期に於ける郭沫若の「書」及び「文学」の論理」（『郭沫若研究会報』第十五号、二〇一六）二頁に、次のようにいう。

その当時の郭沫若所蔵書籍をその文庫目録から見ると、中村不折の手掛けた書の法帖類を多く所有しており、郭沫若は市川に於いて、多彩な書の古典を学び、当時の作品にはそれが反映されていたと言えるだろう。また当時、古文字研究に邁進する中、中村不折所有の甲骨文を利用したことへの謝辞を示す書簡も残っており、その奇縁を裏付けることができるだろう。

⑧ 馬良春、伊藤虎丸主編『郭沫若致文求堂書簡』（北京：文物出版社、一九九七）。中村不折に言及する書簡番号は、一九、三七、四一、四三、六四、六八、七二、八三、一〇五、一〇九、一二六、一三〇、一三一、一七二、一七三、一九三、二二七で、期間は一九三三年八月十七日から一九三七年六月二日におよぶ。

⑨ 劉岸偉「周作人伝」ある知日派文人の精神史（二二二～二三頁）。

田中慶太郎の娘婿である増井経夫・金沢大学名誉教授は、次のように記している。「田中が森鷗外の旧宅を借りて家族を住ませ、あの観潮楼に牧溪の幅をかける優雅な生活は、やはり明治の生き残りであった。」（竹内好『橋川文三編』近代日本と中国）下、東京：朝日新聞社、一九七四）一四四頁。この記述は、岩佐昌曜先生よりご教示いただいた。記して感謝申し上げる。

付記：本稿の紙媒体印刷時には、『周作人日記』からの引用・翻字に誤りがあった。このウェブ公開版において、可能な限り修正を行った。

（二〇一九年四月二十日）

小詩運動挫折、及びその行方

— 周作人・郭沫若・成仿吾の言説を読む

顧 偉 良

一九二〇年代に中国の新詩運動、及び小詩（短詩）運動（1921、23）をめぐる、創造社と周作人等との間に論争があった。この論争は小詩運動にのみ止らず、その矛先は新文化運動にも向けられ、革命文学運動を引き起こすきっかけとなったのである。中国現代文学史では、専ら「五四」運動以降の新文学運動を絶賛しており、中国現代文学の分岐点をめぐる関心度は薄かった。

小詩運動挫折の要因は、管見によれば、三つあると考える。（一）革命文学の台頭、（二）俳文蔑視、（三）俳文をめぐる日本文学と中国文学構造上の違い。俳諧文学への蔑視は個人的な認識もあるが、根本は中国文学において重んじられなかった散文文学のジャンル交替に起因するものである。中国文学には一種の散文ジャンルとしての筆記小説、及び明の小品文があったが、日本の俳文から写生文への変遷といったジャンルの交替は欠如した。この問題は小詩運動挫折ということに象徴的に浮き彫りになっている。小詩実験は多岐に亘り、具体的には論じられないが、小文では小詩運動挫折をめぐるその問題点、及び文壇上の動向について考えたい。

まず文壇上の動向について見てみる。1923年『創造週報』の現れは、確かに文壇上に注目すべき出来事である。郭沫若は創刊号に巻頭詩「創世工程之第七日」を発表し、末尾に「我々は我々の自我を改めて創造しなければならない」（1）と述べている。「創世工程」とは、即ち「自我」の創造を指すものである。その「自我」像には強烈な自意識、またはある種の革命的な言語指向が打ち出されている。正に時

代の精神とマッチしたものである。

さて、次に成仿吾の評論「詩の防御戦」について見てみよう。その中で新詩運動をめぐる胡適、俞平伯等の新詩、小詩（短詩）、及び「哲理詩」について論じられている。成仿吾の論調は新詩の実践的な要素を持つ白話文に異論を唱え、また周作人の推進した小詩実験、俳文紹介を一蹴した。成仿吾は二つのことを強調した。（一）「我々の新文学は時代を建設しつつあるが、吾々は我々の天性に基づいて自由自在に新しい形式と新しい内容を創造しなければならない。如何なる決まった形式にも束縛されてはならない」、（二）「我々の新文学は真摯なる情熱を根底としたものであり、俳諧のような遊戯の態度を受け入れることができない。」（2）

成仿吾の言う「時代の建設」、及び郭沫若の言う「自我の創造」とは、即ち彼らの目論んだ「創世工程」のキャッチフレーズであった。明らかに新文化運動の精神とは同調しないものである。成仿吾は、更に上記の文中で「俳諧について述べたことは、大抵和歌にも当てはまる。兎に角この二つの臭い皮袋、即ち日本人——俳諧と同様の浅薄、且つまらない日本人は、とつくに前から薙露の歌を奏でていた。周君はなぜか彼らの残骸を拾って彼らの為に吹聴しなければならないのか分からない。もう一つの理由は、つまり周君が何のために日本の短詩を紹介したのかも解らないのである。」（2）とも断言した。

日本の俳諧史をみると、俳諧は確かに遊戯的な要素を持っていたが、それがすべてではない。上記の文は、周作人の俳文紹介に対して全く無理解であった。それは中国に歴史的に見られる遺伝的道德性からする俳諧文学への蔑視、または作者自身の偏見によるものと指摘しなければならない。「日本人」云々として触れられた言葉は、ある種の民族的優越感に帰する差別的言論につながりかねないものと見受けられる。彼は日本文学に対して無知であると言っている。

しかし、新詩は決して成仿吾が言うような時代遅れではなかった。

新詩の成果として結実したのが冰心の詩集『春水』（1923）である。『春水』の清新な語り口で新詩の道を切り開いたとも言える。詩集『春水』の出版と周作人とは密接なつながりがあった。これについては、2018年2月九州大学で開かれた『春水』手稿と日中の文学交流周作人・冰心・濱一衛「国際シンポジウムで明らかにされた」。

ここで、成仿吾のもう一つの評論「新文学の使命」に注目したい。その中では「時代の使命」「国語の使命」「文学の使命」といった三つの使命が挙げられている。全文引用はできないが、一種の時代精神と民族的優越感が示されている。

我々の新文学運動は現れて以来、国語の運動であつた。この運動の目的は、自我の表現能力を充実させなければならず、すべての精神と精神の障碍を妨げるものを一掃しなければならぬ。

民族の自負心から我々の単音文字を称賛させ、吾々の乏しい文法を弁護してくれるのを知っている。しかし、他方では卑しい模倣によって外国の低級文字を模倣するものも知っている。それは自己矛盾の滑稽な事である。にもかかわらず一部の人は理の当然だと思っている。例えば、日本の短歌は私にはどこに模倣の価値があるのか分からず、紹介者はまるで陶醉境に入ったようで、模倣者はぞろぞろと大勢いる。(3)

更に、成仿吾の「新しい教養」「低級の趣味の打倒」などの評論において小ブルジョアジーを一掃すべきだと述べ、その矛先は文芸上の「趣味」にも向けられた。成仿吾の評論は文壇上に逆風を巻き返したものと見られる。

ところで、『創造週報』（第3号）に発表された注目すべき郭沫若の宣言文「我々の文学新運動」があるが、その中で、郭は「四、五年前の白話文革命は、ぼろ袷衣に綻びを縫っただけで、汚れた壁に灰色の泥灰を塗ったものの、その中身は依然として破れた綿であり、糞土に過

ぎない。……我々はその悪い根性を根絶させ、破れた綿を焼いてしまひ、跡形もなくその糞土を消え失せさせる。」(4)と述べている。殺伐としたその口調は、罵詈雑言を白話文運動に浴びせた。この宣言文は、記される通り美や芸術に關しての精神を繼承するものではなく、甚だ感情的、情緒主義的な内容であつた。「我々の文学新運動」と名乗つたものの、その精神にはふさわしいものであるとは言えない。中国現代文学の分岐点はそのに示されたと思う。創造社の出発点において彼らの意図することは、象徴的に新文化運動の源流を断ち切ることにあつた。

一方、郭沫若は『インメン湖』の訳本批判及びその他」の一文において、『インメン湖』の訳名について言及した際、周作人の俳句翻訳などについて触れ、「日本の文学史には三十一字の和歌は、十分にその伝統的勢力が衰えていないものの、文芸上においてその俳諧的地位及びその価値はさほど重要でなくなった。」(5)とも述べた。郭沫若の示した見解は、やはり俳諧文学への無理解であると見てよい。

上述の文章に見られるように、郭沫若や成仿吾の示した認識は、新文化運動への攻撃、及び時代精神との適合に位置付けられている。二人の共通点は、日本文学に対する無理解、または蔑視である。更に言えば、彼らの評論に現れた一つの特徴は、即ち倫理精神の欠如である。周作人はさほど本気で郭沫若等を相手にしなかった。彼はシラーの文芸理論について語ったり、思想的根源に遡って文壇上の因襲的、道徳性を批判した。

小詩運動自体は完成したものではなく、実践的な要素を持つている。新詩の実践的な要素を持つ白話文運動、及び小詩運動の目指す方向は、ほかでもなく散文文学のジャンル交替にあるに違いない。ジャンルは方法である。バフチンの言葉を借りれば、「ジャンルは生まれ変わり改新される。そこにジャンルの生命がある」(6)のである。ジャンルは、いわば文学の機能であり、絶えず生まれ変わる。その性質は言語指向

とは異なるものである。

周作人は小詩実験において、「日本の詩歌」、「論小詩」、「日本の小詩」、「日本の風刺詩」、「二茶の俳句」、「啄木の短歌」等の文を発表し、俳諧文学、芭蕉や子規等について詳細な紹介を行った。この点で言うところ、周作人の推進した小詩運動の特色は、日本の俳文、ギリシアの「小景詩」、及びインドの短詩模倣であった。小詩実験は単なる俳文の模倣ではなく、俳文や写生文の要素を取り入れることにあると思う。しかし、恰も来たるべき革命時代の到来を象徴するかのような革命文学の気運が高まる中で、小詩運動は余儀なく挫折した。その要因の一つは、成仿吾等の俳文などに対する蔑視である。その思想的根源は中国文学史に遡って考えなければならない。

周作人は著書『中国新文学の源流』において中国新文学の源流は明にあると指摘し、小品文運動の源流を求めた。しかし、小品文の発展はそれ以降文学史に現れた逆流で妨げられた。日本文学史には殆ど逆流が現れず、文学伝統としての「唯美主義」から俳諧文学、俳句運動、写生文に至るまで散文ジャンルの交替が延々と続いたが、そのような現象は中国文学にはなかった。その意味で、白話文運動の源流は、決して伝統文化の断絶ではなく、寧ろ散文ジャンルの交替、及び文化の継承を目指したものである。胡適や周作人等が目指す新文化運動の精神は、「創世工程」を象徴するような仰々しい「自我の創造」ではなく、伝統文化の継承に示されている。小詩運動の意義はその延長上にあると見てよい。

このように、散文文学のジャンルに対する周作人の眼差しは、階級意識や時代精神を超えたところに現れていることに注目されなくてはならない。ここで、芸術と生活に関する周作人の考えを見てみよう。周作人の随筆集『芸術と生活』（1931）の「自序」にこう述べている。

一人の人間は、ある時期に於いて大抵理想派として、文芸や人

生に対して何らかの主義を抱くことがある。私も以前にユートピアを夢想していたが、特に「新しき村」に憧れ、文学についても相当に主張したことがあった。現在も日本の「新しき村」の友人を尊敬しているが、そのような生活は自分の趣味を満足させる以外に世に対してそれほどの効力を持っていないと思う。人道主義の文学も同然である。自分の趣味を満足させるためならば、その意義は尽くされているが、またそのような生活、及び芸術を営むための理由としても十分である。以前は私が芸術と生活の面で好んでいたが今も変わらない。ただその目的は少し変わった。以前はどちらかというと、彼らの見え隠れ主義を好んだが、今は好ましいのが芸術と生活そのものである。(7)

周作人の中で明らかに「新しき村」運動に対して微妙な変化が起きたのである。とはいえ、彼は必ずしも「新しき村」の理想を否定したわけではない。新文化運動期に周作人の活動は「新しき村」との出会いを抜きにしては考えられないものである。彼の行った「新しき村」に関する一連の紹介はそれである。時代推移の中で周作人の関心は、ユートピアに憧れるよりも、寧ろ芸術と生活との調和、つまり生活そのものを芸術化することにあると思われる。管見によれば、彼の関心は寧ろ生活を芸術化する究極的な問題、俳文世界に目を向けるようになったと思う。それは「文」の変容が自由自在になる趣味の世界であり、正に文と趣味との連結である。それが周作人の文芸上の趣味である。

そして、周作人は晩年に日本文化において最も影響を受けたのは兼好であると語っており、この言葉の持つ意味は極めて重要であると思われる。ジャンルは方法である。それは究極の文学様式である。『徒然草』はそれである。日本文学の様式を考えると、中世文学の特色は貴族時代の詩文模倣から脱皮して、歌人たちの体験や生活から新しい芸術が生まれたのである。実に多彩な散文文学のジャンル、文芸様式が

生まれ変わり、出来事としての文学革命が興ったとも言えよう。江戸文芸に俳諧文学の花が咲いたのは、即ちその延長上にあると見てよい。そこに日本文学の独自性と創造性が現れている。

文学史に対する読み直しは常に必要である。中国文学にも様々なジャンルがあるが、過去においてジャンルの交替は理想的でなかったようである。一例として中国文学において依然として漢詩や美文の模倣に止まっているという節があるように思える。永遠なる模倣が続いている。国民的詩人と見なされた蘇軾に対しての持ち上げは、その好例である。

最後に、胡適・青木正児往復書簡について触れてみたい。廿世紀初頭に現れた新文化運動をめぐって『支那学』の創刊号（2号、3号）に掲載された青木正児の論文（胡適を中心と渦いてゐる文學革命）では「文学革命」（白話文学）について触れ、高く評価した。胡適は青木正児宛の書簡の中で、「先生は我々に寄せた『中国の長所をもっと発展させ、足りないところは西洋のすぐれた文学を持つてきて徐々に補足すれば、立派な新しい文学が作れます。』という希望は、正に我々一同の願いです。しかし、我々の力は弱すぎて、恐らく破壊をする処が多く、建設する所が足りないでしょう」（8）と書いている。胡適は中国古典小説の研究者として、このような洞察力と想像力を働かせることができたのである。「破壊」と「建設」こそが、新文化運動と政治化した「五四運動」との分岐を作った要因だったと思われる。胡適の言う「中国文芸復興」は果たして到来するのだろうか。

新文化運動を高く評価した青木正児に比べて、白話文運動に泥を塗った郭沫若のそれは、誠に好対照となっている。専ら階級性や時代精神を唱えた革命文学の登場は、彼らの吹聴する「自我の創造」の根底において情緒的な民族主義が流れているのを見逃してはならない。この時期に発表された胡適や周作人等の文芸評論に比べてみれば、郭沫若等の崇拜した「自我」、または時代の精神というものは、倫理精神の

欠如した一種の邪悪な精神に染まったとも言える。「革命文学」の正体はそれである。正に周作人が批判したように、彼らの思想的根源において因襲的道德性が如実に示されている。因みに後期創造社メンバーの大半は、革命家になったのである。

二十世紀の中国文学に現れた左翼思想は、まるで旋風の如くに様々な領域に浸透している。日本のプロレタリア文学の場合は、私小説などの手法で書かれた優れた作品が数多く見られるが、それに比べて郭沫若や成仿吾等が唱えた「革命文芸」は、文学運動を推進するよりも、寧ろ新文化運動を破壊することであり、文芸と人間社会との調和に反するものと思われる。

注

- 1 郭沫若「創世工程之第七日」、『創造週報』第1号、1923年5月、上海書店影印、1983年
- 2 「詩之防御戦」、『創造週報』第1号、1923年5月、『成仿吾文集』所収、山東大学出版社、1985年
- 3 「新文学之使命」、『創造週報』第2号、1923年5月、『成仿吾文集』所収
- 4 「我們的新文学運動」、『創造週報』第3号、1923年5月、『郭沫若全集』第16卷、人民文学出版社、1989年
- 5 郭沫若は「批判意門湖譯本及其他」（『創造季刊』第一卷第二期）「第二評論」23～36頁、上海書店影印）において、ドイツの作家テオドル・シュトルムの小説『インメン湖』の訳名に言及した際、周作人の俳句翻訳や和歌について触れている。
- 6 『ドスチエフスキーの詩学』219～220頁、ミハイル・バフチン著、望月哲男・鈴木淳一訳、筑摩学芸文庫、2005年
- 7 「自序」、『周作人自編文集・芸術と生活』、河北教育出版社、2002年
- 8 「胡適致青木正児之二」、『青木正児家蔵中国近代名人尺牘』、19頁、張小鋼編注、大象出版社、2011年

大躍進、調整時代、一九五八年から一九六二年までの郭沫若の文学と書

―視察時に於ける第三期郭体から第四期郭体までの過程とその詩、書
思想

松宮 貴之

- 1 はじめに
- 2 一九五八年から一九六二年までの視察データ
―残存する漢詩を中心としての分析
- 3 視察と漢詩と書の意義
- 4 視察書体の変遷
―毛沢東の復権と詩の唱和へ
- 5 小結

1 はじめに

郭沫若は一九五八年五月、科学技術の現代化の実現と、国防建設と尖端科学技術方面の専門人材の育成のために、当時の中国科学院院長郭沫若グループの科学者と、党中央に中国科学院創建の新型大学の建議を提出。建議は党と国家リーダーの劉少奇、周恩来、鄧小平、聶榮臻らの支持を得て、中央書記処會議で批准され、同年九月に中国科学院技術大学が北京で正式成立し、國務院の任命で郭沫若が校長となった。建国期から没年の一九七八年六月に至るまで、中国科学院首任院長、中国科学院技術大学首任校長、中央人民政府委員、政務院副總理兼文化教育委員會主任、全国人民代表大會常務委員會副委員長、中国科学院哲学社会科学部主任、歴史研究所第一所長、中国人民保衛世界和平委員會主席、中日友好協會名譽會長、中国文聯主席、中国共産党第九、

十、十一届中央委員、第一・二・三・五届全国政協副主席等を務めた郭沫若にとつて、一九五八年は一つの文化行政面での節目となる年であり、大躍進政策時代から、經濟調整時代、文化大革命前へと連なる彼の足跡を構成する大きな意義のある時期と言える。
本稿では、その足取りを追うことから始め、詩、書作との關係を探つて行きたい。

2 一九五八年から一九六二年までの視察データ

―残存する漢詩を中心としての分析

郭沫若は政治家であるが故に、国内外を問わず會議や視察に飛び回つていた。つまり北京の中南海を基点に、政治、文化などの行政的な目的で、中央の伝書鳩的な役割を演じていたと言えるだろう。そしてそれが、所謂、中南海と地方との時差を意味している。

本章では、あらゆる視察を行つた郭沫若の漢詩、それも『郭沫若旧体詩詞系年注釈』⁽¹⁾に残存するものを基に、視察のデータを復元したい。

前近代的な士大夫が旅や左遷時に、多く漢詩や書を残しているが、郭沫若にとつては、これらの視察が、そういう旅であつたと言えるかもしれない。

『郭沫若旧体詩詞系年注釈』一九八二年に拠ると、一九五六年は六首、一九五七年は十首と少なく、一九五八年以降増産されている。これは、百花齊放期は旧詩を作る旅行の機会が少なかったことと、行政的な多忙さによるところが大であるが、一九五八年後の旧詩の増産は、大躍進政策に伴う視察旅行に便乗して、文化面にも何らかの予算が付けられたことが推察できる。

それでは、残された漢詩を中心に一九五八年以降の、郭沫若の視察に關係する足取りを追つてみたい。

付言であるが、残された書の有無は確認できたものという意味である。

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1957年12月～1958年1月	访埃及杂吟十二首	エジプト	アジア・アフリカ人民団結会議出席	無
1958年2月1日(北京)	題司马迁墓	陝西省文化局 の要請で題詞	歴史	無
1958年3月上旬	蝶恋花	北京	頌歌(妇女节)	無
1958年初(北京)	为如东水利工程题诗	手紙への返書 にて題詞	大躍進政策	無
1958年5月/6月	遍地皆写不羸十四首	河北省西北部	大躍進政策	無
1958年7月1日	雄师百万挽狂澜—“七一”参加十三陵水库落成典礼书怀	北京	大躍進政策	無
1958年7月初	颂十三陵水库(西江月二首)	北京	大躍進政策	有
1958年7月中旬	在载军大会上二首	スウェーデン	ストックホルム軍事大会	無
1958年8月19日	声声快	北京	大躍進政策	無
1958年9月7日	告别北戴河	長春	大躍進政策	無
1958年9月13日	庆武钢一号高炉出鉄(调寄《西江月》)	北京	大躍進政策	無
1958年10月28日	志愿军凯歌	北京	頌歌	無
1958年秋	歌颂中朝友谊 四十八首	朝鮮	朝鮮視察	無
1958年12月	咏黄山灵芝草	北京	大躍進政策	無
1959年1月25日	颂武汉/访武钢	武漢	大躍進政策	無
1959年1月26～30日	英雄树下花争放(迎宾馆)	広州	歴史・大躍進	有
1959年2月12日	游西湖	杭州	大躍進政策	無
1959年2月12日	游孤山/登六和塔/虎跑泉	杭州	歴史・大躍進	無
1959年2月12日	花港观鱼	杭州	歴史・文化	無

1959年2月16日	雨中登国际大厦二首	上海	大躍進政策	無
1959年2月18日	颂曲阜/观孔府/游孔林/游孔庙/观大成殿	山東	歴史	無
1959年2月19日	齐鲁多文物六首(趵突泉)	山東	歴史・大躍進	有
1959年2月25日	喜雪	北京	頌歌	無
●1959年2月26日	再喜雪	北京	頌歌	有
1959年2月	因如秦运河在九圩港竣工题贺		大躍進政策	無
1959年3月2日	题革命烈士诗抄	北京	頌歌	有
1959年3月30日	《光荣的中国人民志愿军》题辞	北京	頌歌	無
1959年3月	电影	北京	文化・世界平和	無
1959年5月	游北欧诗四首(在瑞典首都游米利士园)	スウェーデン	視察	有
1959年6月7日	题徐悲鸿《八骏图》	北京	文化	無
1959年6月28日	访无锡四首	無錫	歴史・大躍進	無
1959年6/7月	【豫秦晋纪游二十九首】			
1959年6月30日	访安阳殷墟/观园形殉葬坑十三首	安陽	歴史	無
	登袁世凯墓	安陽	歴史・政治	無
1959年7月	颂郑州	鄭州	歴史・大躍進	無
	访花园口		歴史	無
	颂洛阳二首	洛陽	歴史	無
●	观龙门石窟斥美帝摧毁		歴史・政治	有
	盗窃文物二首			
	访奉先寺石窟		歴史	無
	访半坡遗址四首	西安	歴史	無
	重游华清宫读董老和诗		歴史・政治	有

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1959年7月	因再用旧韵奉酬			
	颂太原	太原	大躍進・歴史	無
	游晋祠		歴史	有
	看三槽出钢		大躍進政策	無
	访窦大夫祠		歴史	無
	经济交流	北京	大躍進政策	無
	游莫干山二首	杭州	歴史	無
1959年8月3日	题济南李清照故居	済南	歴史	無
	题山东民间剪纸		大躍進・文化	無
1959年9月5日	题《图书馆学通讯》	北京	学術	無
1959年9月5日	颂北京四首	北京	頌歌	無
1959年9月7日	题气象馆	北京	学術・建築	無
1959年9月12日	题福建省工艺美术展览会	北京	文化	無
1959年9月14日	十年建国增徽识八首	北京	政治・建築	無
1959年10月7日	会运会闭幕	北京	スポーツ	無
1959年	赠朱琳同志		文化	無
1959年11月28日	咏邱少云烈士		政治	無
1960年	题赠东风剧团		文化	無
	题成都带江草堂		文化・政治	無
●1960年1/2月	重庆行十六首(飞过秦岭)	重慶	歴史・政治	有
	题红岩村革命纪念馆		政治・文化	無
1960年3月22日	颂延安	延安	頌歌	無
1960年3月22日	访杨家岭毛主席所住窑洞	延安	歴史・大躍進	無

1960年3月22日	谒延安烈士陵园	延安	歴史・政治	無
1960年3月23日	游乾陵/吊章怀太子墓	西安	歴史	無
1960年5月27日	喜闻攀上珠穆朗玛峰	チベット	学術・政治	無
1960年6月8日	紫竹院观鱼二首	北京	民間生活	有
1960年9月4日	蝶恋花-《题园林植物栽培》	北京	百花斉放	無
1960年9月6日	十六字三首-题国画插图版《百花斉放》	北京	百花斉放	有
1960年9月10日	读《忠王李秀成自述》二首	北京	歴史	無
1960年9月30日	赠日本友人/《夕鹤》	北京	政治・外交	無
1961年1月6日	游古巴松树河谷	キューバ	政治・外交	無
1961年1月19日	飞渡大西洋	スイス	政治・外交	無
●1961年1月23～25日	昆明杂咏九首(游黑龙潭)	昆明	歴史・文化・大躍進	有
1961年2月3日	挽杜国庠同志二首/校场口事件十五年	北京	歴史・政治	無
1961年2月11日	颂湛江	湛江(広東)	頌歌	無
1961年2月12日	雷州青年运河	雷州半島(広東)	建設	無
1961年2月13日	游湖光崖	福建	歴史	無
1961年2月16、17日	题为海南岛兴隆农场/咏油棕/鹿回头	海南島	産業	無
1961年2月19、20日	游天涯海角/天涯海角	海南島	文化	無
1961年2月20日	颂海南岛	海南島	頌歌	無
1961年2月27日	赠崖县歌舞团	海南島	文化	無
1961年2月27日	咏五指山	海南島	歴史	無
1961年3月3日	访那大	海南島	歴史	無
1961年3月10日	访柳侯祠	海南島	歴史	有
1961年3月15日	游从化温泉	海南島	文化	無
1961年3月18日	回京途中	武漢	歴史・文化	無

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1961年3月27日	诗一章一献给第二十六届乒乓球锦标赛	北京	スポーツ	無
1961年3月31日	题郁曼陀二首	北京	歴史・文化	無
1961年5月7日	访泰山杂咏六首(在极顶观日出未遂)	山東	歴史	有
1961年6月16日	颂党庆二首(其一)	北京	頌歌	有
1961年7月1日	再题福建省工艺美术展览	北京	文化	無
1961年8月30日	曼德勒既事	北京	歴史	無
1961年9月3日	回昆明	昆明	歴史	無
1961年9月5日	宿楚雄二首	楚雄(雲南省)	歴史・文化	無
1961年9月7日	在昆明看演话剧《武则天》	雲南	文化	有
1961年9月7日	万人冢/天生桥	雲南	歴史	無
1961年9月7、8日	大理温泉/大理石厂/望夫云/洱海月	大理	文化	無
1961年9月9日	负石观音	大理	歴史・政治	無
1961年9月9日	朝珠花	大理	文化	無
1961年9月12日	赠关肃霜同志	雲南	文化・政治	無
1961年9月12日	题为云南农业展览馆	雲南	文化	無
1961年9月14~18日	再出夔门七首	(三峡)四川	文化・歴史	有
	(宿万县)/(过西陵峡其一)		歴史・政治	
1961年9月18日	蜀道奇		歴史・政治	有
1961年9月20日	谒晋冀鲁豫烈士陵园(西江月)	河北	歴史・政治	無
1961年9月20日	登赵武灵王丛台	河北	歴史・政治	無
1961年10月	对联一副	北京	政治	無
1961年10月7日	题赠日本代表团	北京	外交	無
1961年10月25日	看《孙悟空三打白骨精》	北京	文化・教育	無

1961年10月26日	湖笔	北京	文化	有
1961年10月29日	游上海豫园	上海	文化・歴史	有
1961年10月30日	游闵行	上海	大躍進	無
1961年10月30日	登锦江南楼十八层	上海	建築	有
1961年10月31日	赠上海昆实验剧团	上海	文化	無
1961年11月1日	溯钱塘江三首	浙江	文化・歴史	無
1961年11月	七里泄	浙江	建設	無
1961年11月5日	访句山樵舍	浙江	文化	無
1961年11月9日	流溪水电站即景	広東	建設	無
1961年11月10日	游凤院棵树园	従化	文化	無
1961年11月13日	从化温泉	従化	文化	無
1961年12月1日	流溪河水库观鱼	広州	文化	無
1961年12月3日	观百丈瀑二首(其一)	広州	文化	有
1961年12月9日	远眺	従化	文化	無
1961年12月17日	看《牛郎织女》舞剧	従化	歴史・文化	無
1961年12月21日	游端州七星岩四首	端州	文化	無
1961年12月22日	题桂花轩/游鼎湖山	肇慶	文化	無
1961年12月28日	题赠广东图书馆	広州	建築・文化	無
1961年12月	登阅江楼怀叶挺及独立团诸同志	肇慶	歴史・政治	無
1961年冬	偶成		文化	無
1962年1月7日	访萝冈洞四首	広州	文化	無
1962年1月9、10日	再访萝冈洞/题广州听雨轩	広州	文化・政治	無
1962年1月14日	游佛山诗三首	広東	文化	無
●1962年1月18日	郑成功光复台湾三百周年纪念	広東	歴史・政治	有

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1962年1月21日	咏黎族姑娘/咏椰子树	広東	文化	無
1962年1月25日	南海劳军	海南島	政治	無
1962年1月30日	东风吟四首	海南島	文化・政治	無
1962年1月30日	咏梅(卜算子)	広東	文化・政治	無
1962年2月3日	看渔民出海	海南島	歴史・文化	無
1962年2月7日	海南岛西路纪行十一首 (赴崖城道中)/(东方县途中口占)	海南島	文化・政治	
1962年2月9日	重访那大学院	海南島	教育	無
1962年2月11日	题海口东坡祠	海南島	歴史・政治	無
1962年2月	题《五朵红云》	海南島	文化	無
1962年2月24日	题品石轩		文化	無
1962年2月24日	七律二首		文化・政治	無
1962年3月7日	访孙中山先生故乡五首	中山	政治・歴史	有
1962年3月8日	咏梅二绝有怀梅兰芳同志二首一题传记纪录片《梅兰芳》	広州	文化	無
1962年3月	赠祝希娟同志		文化・政治	有
1962年3月30日	题为西泠社六十周年(七律)	北京	文化	無
1962年4月9日	题为赵一曼纪念馆	北京	建築・文化	有
1962年4月	题赠范政	北京	文化・政治	無
1962年4月12日	闻广西博白有绿珠里	北京	文化	無
1962年6月	挽涂长望同志	北京	政治	無
1962年7月17日	纪念八一建军节三十五周年	北京	政治・軍事	無
1962年夏	银画银勾一题湖州笔店一品斋《湖州颖谱》	北京	文化	無

●1962年8月25日	咏北戴河二首(其二)	河北	歴史・政治	有
1962年8月26日	题沈阳抗美援朝烈士纪念碑		軍事・政治	無
1962年8月26日	题天福山抗战起义纪念碑二首		軍事・政治	無
1962年9月6日	北戴河一夕即景	河北	文化	無
1962年9月10日	游鸽子窝	河北	文化	無
1962年秋	火中不灭凤凰传—黄继光，邱少云二烈士逝世十周年	北京	軍事・政治	有
1962年9月25日	题为黄山风景摄影展览	北京	文化	無
1962年10月19日	题上海延安饭店	上海	政治	無
1962年10月22日	如梦令二首	舟山	領土・政治	無
1962年10月23日	西江月	舟山	頌歌	無
1962年10月23日	看舟山集艺越剧团演出《双阳公主》	舟山	文化	無
1962年10月23日	访普陀山	普陀県	政治	無
1962年10月26日	访宁波天一阁	寧波	歴史・政治	無
1962年10月28日	访三味书屋	紹興	歴史	無
1962年10月28日	东湖	紹興	文化	無
1962年10月29日	钗头凤(游沈园)	紹興	歴史・文化	無
1962年10月29日	题《试马》	杭州	文化	無
1962年10月29日	登钱塘六和塔	杭州	歴史・文化	無
1962年10月	途次上饶	上饒	歴史・政治	無
1962年11月1日	游武夷泛舟九曲池	福建	歴史・政治	有
1962年11月1日	游武夷二首(其二)	福建	歴史・文化	有
1962年11月	咏南平二首	南平	歴史	無
1962年11月	自南平至福州	南平	文化	無
1962年11月6日	如梦令—参观福建省博物馆	福建	学術・文化	有

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1962年11月	题贈福州脱胎漆器厂	福建	文化	無
1962年11月8日	游鼓山二首	福州	歴史	無
1962年11月12日	途次莆田	莆田	歴史	無
1962年11月12日	木兰陂六首/题东圳水库	莆田	歴史・建設	無
1962年11月13日	咏泉州/咏五里桥	泉州	歴史・政治	無
1962年11月13日	金鸡水利工程歌	泉州	建設	有
1962年11月16日	参观郑成功纪念馆	厦門	歴史	有
1962年11月21日	用厦门高集海堤	厦門	建設	無
1962年11月	登日光岩	厦門	歴史・政治	無
1962年11月23日	访问厦门前线二首	厦門	歴史・政治	無
1962年11月23日	题贈某炮艇/登云顶岩访问前线部队	厦門	政治	無
1962年11月23日	西江月－ 题贈厦门大学	厦門	教育	無
1962年11月24日	游南普陀	厦門	歴史・文化	無
1962年11月30日	书贈厦門文物商店	厦門	文化	無
1962年冬	西江月 (1962年初冬在鼓浪屿看龙溪专区木偶剧团演出)	鼓浪嶼	文化	無
1962年11月下旬	重游三都澳	三都澳	歴史・文化	無
	在三都澳水警区二首	三都澳	政治	無
	乘炮艇由三都澳赴黄岐	厦門	政治	無
	在黄岐	黄岐	政治・領土	無
1962年12月25日	喜看电影《槐树庄》	北京	文化	無

図版は『十世纪书法经典 郭沫若』河北教育出版社 广东教育出版社一九九六年十二月、郭沫若书法集『郭沫若书法集编委会 四川辞书出版社出版发行 一九九九年』、依据教育部中小学书法教育指导纲要编选 中国最具代表性碑帖临摹范本丛书 郭沫若卷『人民美术出版社二〇一七年十一月参照。

(●は、当論文で図版、分析あり。)

以上、郭沫若の一九五八年から一九六二年までの漢詩と書は上の表のように整理できる。

郭沫若の大躍進政策に伴う視察は、一九五八年に始まりはするが、当時の書はあまり残されておらず、視察自体も一九五九年に本格化し、以後も様々な目的を持つて行われているが、その視察地は、中国科学院分院を始め、極めて政治的、文化的な地であり、行くところどころを、紅色に染めていく意味合いを持つて、詩は賦され、書は揮毫されている。また作詩の目的を、「歴史」・「学術」・「政治」・「文化」等と分類した。本来峻別できるものではないが、特にそういう要素が強いという意味で用いたことを断つておく。取り分け、郭沫若にとつて「歴史」とは、「イコール学術」の意味も多分に含んでいる場合が多いと言えるだろう。

次章では、その残された書が、どのような時期、場所、意味、様式で書かれたのかを分析し、その変遷を辿っていきたい。

3 視察と漢詩と書の意義

ここでも取り上げるのは、視察の際の詩と書に限定した。無論、郭沫若は、首都北京でも詩を詠い、書も残しているが、ここでは資料が膨大になるので、ほぼ割愛したい。

あと書式サイズは、一九五五年頃から使われることの多い、今で言う四尺全紙(小画仙)に絞ったのは、郭沫若が視察時に残した書は、ほぼそのサイズであり、その紙の様式が、視察に常備された紙だと推定できるからである。

では年代を追って、その場所、意味、書様式などを分析していきたい。

Aこの「再喜雪」は一九五九年二月二六日の作詩で、二二日にメキシコ将軍、カルデナス随員などの全国主要都市の視察を終え、北京に帰り発表されたもので、その書はその春、小圃同志、つまり彭桂萼のために揮毫されている。そして、内容は(図1)

彤：春雪望無涯 習習東風煥物華
赤鼎翻成銀世界 青山齊放白
梅花 豐年魚夢天同樂 公社人歌日不斜
海外歸來雙燕子 呢喃迷却
舊時家
一九五九年春 郭沫若書

図 1

(本文)

彤彤春雪望無涯 習習東風煥物華 赤鼎翻成銀世界 青山齊放白
梅花 豐年魚夢天同樂 公社人歌日不斜 海外歸來雙燕子 呢喃迷
却旧時家

(大意)

やわらかな春の雪が果てしなく続き、そよふく社会主義の風が景色を輝かせている。赤い中国は、銀世界に変わり、緑の山には、白梅の花が一斉に咲き誇る。豊年の魚の夢は天と共に楽しむこと。人民公社の歌頌は、日が沈むことはない。海外から帰ってきた燕の夫婦、轉りながら昔の巢を探して迷っている。

つまり、大躍進と人民公社運動に抛る変革を、美しき中国の風景として詠い上げている。つまり、人民公社運動で大きく変わった中国の姿を早

春の風景と、舞い戻った燕に託して、帰国華僑の夫婦が故郷の余りの変わりように生家を探しあぐねている様子を述べることで賛美している。毛沢東が五八年に提唱した「兩結合」(革命的リアリズムと革命的ロマンチズムの結合)芸術理論の一つの実践であらう。

従来、郭沫若の大躍進政策時の新詩の研究は、先鞭が付けられているが(2)、詩についての分析は、皆無に等しい。ただこの詩からは、新詩同様の政治ロマンチズムは、内包されていることが読み取れ、その表出が、書としての姿態に他ならないと言えよう。但し、第二期郭体と比べると、やはり些かのトーンダウンが読み取れる。私は以前拙稿「郭沫若の大躍進政策期に於ける書法様式の類型とその背景について」(3)の中で

これらのように、公共性建築等、政治性プロパガンダと言うよりは、名所の感慨を詠じ、また個人的に同志に委嘱されて書す場合、純正の第二期郭体ではなく、第一期郭体と第二期郭体が混合されたような様式となっている。これをここでは、第三期郭体と定義したい。

またこの現象によつて逆説的に第二期郭体が、公に対して、共産党を謳歌する嬉々たる生命力を内包したプロパガンダを目的とする様式であり、その程度の如何によつて、書風が変化していたことを如実に物語つていると言えるだろう。さらには、どこに飾られるかという意識も、やはりその書風に影響を与えていたと言えるかもしれない。と述べた。

それを踏まえても、これらの書を分類すれば、第一期郭体(文語への口語の流入様式)と第二期郭体(第一期郭体への文語体流入様式の止揚体)つまりやはり第三期郭体と見做すべきものと考えられる。

B 郭沫若は、一九五九年六月二八日から、安陽、鄭州、洛陽、三門峽、西安、太原等の視察に向かった。その時の詩で、翌七月十一日に帰京し、十三日に発表されたものである。

当時の漢詩は、『秦晋紀游二十九首』と言われ、その中の「觀龙门石窟斥美帝摧毀(竜門石窟を參觀しアメリカ帝國主義の破壊を責める)」

(図2)が当詩であり、洛陽博物館のために書かれた、まさに歴史性、学術性の高い意味合いを担っている。

(本文)

中州文物誰摧殘 屈指当推美利堅 唐墓已開像駿馬 竜門又見劫
飛天 挖牆鑿壁真堪恨 鮮恥寡廉殊泰然 贓品今存博物館 按図索
驥待来年

(大意)

中州文物誰摧殘 屈指当推美利堅
唐墓已開像駿馬 竜門又見劫
飛天挖牆鑿壁真堪恨
鮮恥寡廉殊泰然 贓品今存博物館
按図索驥待来年

図2

河南省の文物は誰が毀損したのか、指折り数えてみればみなアメリカ。唐墓では既に駿馬が盗まれたと聞き、龍門ではまた飛天の彫刻が強奪された。

れたのを見た。牆を掘り壁を鑿つやり方はまことに憎らしい。清廉さも恥もなく平然としている。盗品は今やアメリカの博物館に陳列、証拠をつかんでの盗品捜索は、今後を待とう。

当時、大躍進政策の下、反浪費、反保守運動の中で、近現代的な文物の収集、整理工作が行われ、一九五九年には社会主義建設之部という陳列が完成された。つまり、厚今薄古という政府の指導の下ではあるが、社会主義と歴史を結びつける役割を持つて、博物館が林立する(4)。

そしてこの洛陽博物館も、一九五八年に建立されたものであり、郭沫若がそれら博物館事業の指導的な任の一翼を担っていたことは言うまでもなからう。歴史遺跡の豊富な中原地方の代表的な博物館なのに、貴重な歴史遺産の展示が少ない。展示されても毀損されたものが多い。あれも、これもと指を折つて数えるときみなアメリカに持ち去られたか、アメリカ

カの手で毀損されたものばかり。いまはアメリカの博物館にあるしれらを、いつか証拠を突き付けて取り返すぞ、という決意で詩を結ぶ。当時の郭沫若の主要な敵はアメリカ帝国主義。これも反米愛国が一つのテーマ。そのような政治的立場で詠われた詩が、この詩であり、そして書でもある。この図2の書も、第三期郭体に分類できるが、その中でも図1同様、第二期的、つまり文語的要素が強い書風と言えらるだろう。

文革前に郭沫若は、自己の歴史研究を全面否定するが、逆から見ると全否定しなければならぬくらいに郭沫若は、歴史を重んじていた。つまり毛沢東と今古の重心の綱引きを、常に行っていた忠臣であつたと言えるのではなからうか。

屏山界秦蜀宛轅萬竜遊
海拔四千米天高一指頭
雪湍眉下湧雲海望中收
瞬息巴渝到嘉陵綠似油

図3

北京に帰つたその六日に「重慶行十六首」として整理した。そのなかで、図3の「飞过秦岭」(飛行機で秦嶺山脈を越える)が詠われている。そしてその款記から、黎夫同志、つまり常黎夫に

与えられていることが分かる。

(本文)

群山界秦蜀宛轅萬竜遊 海拔四千米 天高一指頭 雪湍眉下湧
雲海望中收 瞬息巴渝到 嘉陵綠似油

(大意)

群がる山々は秦(陝西省)と蜀(四川省)の境界、その山容は何万もの龍がゆるやかに遊ぶかのようにだ。海拔は四〇〇〇メートル、天高く

その頂きを指す。雪波が眉の下に湧き、雲の海は視界に収まる。一瞬で巴渝(重慶)に着き、嘉陵の川の緑色は、油のようになめらかにさらさら輝いている。

これは、機上からの眺めを詠ったもので、一九四五年蒋介石との談判のために初めて延安から重慶に飛んだ機上で作った、毛沢東の最も有名な作品「沁園春 雪」と同じく、中国の大地の美しさと雄大さを、「万龍」雲海などの大胆でロマンティックな語を運用して描いている。この詩を作ったとき、郭沫若の脳裏には毛沢東の「雪」が去来していたのではなかろうか。な政治性はあまり汲み取れないが、その書は、第二期に近い気迫が込められている。

D 一九六〇年十二月末からキューバでの式典、視察の帰途、一九六一年一月二三日に昆明に立ち寄った。そして「游黒龍潭」(黒龍潭に遊ぶ)【昆明杂咏九首】が発表され、図4の如く書として残っている。

(本文)

茶花一樹早桃紅 百朵彤雲嘯傲中 驚
醒唐梅睜倦 襯陪宋栢倍姿雄 崔嵬
筆立天為紙 婉轉橫陳地吐紅 黒水祠
中三異木 千年万代頌東風

(大意)

ツバキの木はとくに桃紅色の花をつ
け、何百もの紅霞が自由に咲き誇つて

いる。目覚めた唐梅がぱつちり、寝飽きた目を見開き、ぴつたり寄り添う宋栢が雄姿を際立たせている。険しく切り立つた岩山の空を紙となし、やわらかに体を丸めて横に伏せ、地に紅を吐く。黒龍潭の祠の三種の異なる木は、千年万代にわたり、社会主義を讃えている。そして款記には、次のように書かれている。



図4

一九六一年一月廿三日游昆明黒龍潭即事、祠中三異木、即唐梅宋栢与茶花也。(昆明の黒龍潭に遊び、眼前の事を詠んだ。祠中三異木とは唐梅、宋栢とツバキである)

この雲南と三異木と郭沫若との関係については、先行研究がある(5)。雲南の風景と歴史を社会主義の紅色に染めたこの漢詩は、横幅で書かれ、これも第三期郭体と言えるだろう。

E 一九六一年十一月から一九六二年三月十日の帰京まで、郭沫若は四か月の長期間、広州で過ごしている。この長期の滞在が、調査、遠征なのか左遷なのか、その意味については、また稿を改めて分析したいが、当時も多くの詩と書を残している。

その残さ

れた書は、やや大味なものが多いが、

その中でも、一九六二年一月十八日の鄭成功光復台湾三百周年紀念(鄭成功台湾解放三百年記念)の書は、落ち着いた佇まいを見せている(図5)。

(本文)



図5

台湾自古属中華 漢族高山是一家 豈許腥羶蒙社稷 不容蟲賊毀桑麻 千秋大業驅荷擄 一代英雄賜姓爺 三百年來民氣盛 教他紙虎認前車

(大意)

台湾は昔から中国に属し、漢族と高山族は一族である。西方の侵略者が社稷を侵すことどうしてを許そうか。害虫が桑麻を喰らうの

を許しはしない。オランダを駆逐したのは千年の大業、一代の英雄は国姓を賜る。三百年間、人民の意気は盛んで、張子の虎(帝国主義)

魏武東征此
地過秦皇遺
劍未應磨秋
風拂岸翻銀
浪滄海連雲
汜月環樓海
把酒看春鳥
園東園教教
名碑碑在
此岸地草天
誦戴河

一九六二年八月二三日作、河北省視察時を
想い作られた 咏北戴河二首(其二)を見てみたい。(図6)

魏武東征此地過 秦皇遺劍為應磨 秋風拂岸翻銀浪 滄海連雲汜
碧波 明月瓊樓誰秉燭 青春高閣我聞歌 解衣磅礴忘吾汝 席地暮
天誦戴河

体が用いられることが多い。

F 一九六二年期の作としてもう一つ八月二五日の作、河北省視察時を
想い作られた 咏北戴河二首(其二)を見てみたい。(図6)

(本文)
魏武東征此地過 秦皇遺劍為應磨 秋風拂岸翻銀浪 滄海連雲汜
碧波 明月瓊樓誰秉燭 青春高閣我聞歌 解衣磅礴忘吾汝 席地暮
天誦戴河

(大意)
曹操は東征してこの地を過ぎ、始皇帝の東巡の遺跡は今も残っている。
秋風は岸に吹いて銀の波を翻し、蒼海は雲を連ね、青い波をあおいで
いる。明月の高樓、誰が燭を取るのだろうか。青春の高閣で私は歌を
聞く。毛沢東主席の恩恵は、我と汝を忘れさせ、地べたに座つて夕暮
れに、毛主席の詞「北戴河」を常に朗誦している。

この書は、杭州の西泠印社の為に書かれたものであるが、一九六一年頃
からこの手の細身の書風が散見される。
無論その形態は、第三期郭体に分類できるが、郭沫若は使う筆を愛用

に前の失敗の
教訓を認めさ
せる。

この幅は、厦
門鄭成功紀念
館の為に書か
れたもので、公
共建築物には、
当時この第三期郭

体が用いられることが多い。

4 視察書体の様式と変遷

—毛沢東の復権と詩の唱和—

第3章で見てきたよ

うに、郭沫若の一九五
八年から一九六二年の
書風は、概ね第三期郭
体、つまり第一期の文
語様式への口語様式の
流入体と、第一期の文
語様式の流入体たる第
二期郭体の止揚体で概ね解消されるものであったと言える。

時に第一期が、また時に第二期が強調され、その振り幅のなかで、演
出されたものであった。

敢えて言えば、一九六一年十一月から広州で過ごした四か月の期間、
当時の書は、些か粗野なものが多く、それは視察体とは違う、別の意味
合いを持ったものだったのかもしれない。

しかし、象徴的に言えば、一九六三年一月元旦の東風、つまり社会主
義への頌歌「滿江紅」詩を基点に、第三期郭体に再び第二期的な氣迫が盛
り込まれるようになる。例えば、一九六三年十月九日作詩の図7の「国庆
节之夜月亮与太阳对话滿江紅」(国慶節の夜、月と太陽の對話)のよう
に、第四期郭体と言うべき、第三期とはまた別物の態様を示すようにな
り、それが引伸されて、一九六七七年の毛沢東との唱和体、懷素風の連綿
体(図8)へと展開されていく。

これは、視察体第三期郭体 から毛沢東の好んだ頌歌へ、と新たな旧
詩の在り処を模索、発見していく姿が、書にも反映されていたものと考え
えられる。

國慶之夜
月亮與太陽對話
滿江紅
毛澤東
一九六三年十月九日作
詩
郭沫若
一九六三年十月九日作
詩
郭沫若

図7

5小結

本稿では、大躍進期から国民経済調整時代、特に一九五八年から一九六二年の郭沫若の視察時の書について言及した。

総括して言えば当時の視察時の書は、常備されていたと考えられる四尺全紙に、第三期郭体で書かれたものと定義できるだろう。

そして拙稿「郭沫若の大躍進政策期に於ける書法様式の類型とその背景について」に於いて

さらにこれら郭沫若の、後に名所旧 跡詩・記念詩・建築詩等にまで用いられるようになる第三期郭体書風についての詳細は、別稿に譲りたい。

と課題を示したが、この名所旧跡詩・記念詩・建築詩等という分類は概ね視察体様式」と総括できることが、少しく明らかになったと言える。

そして今後の課題として、一九六三年から一九六五年の文革に至る三年間の郭沫若の書が、如何に変貌していったか、そしてそれは、どのような政治的背景を有し、それが文学、書に投影されたか分析する必要があると考える。

その課題を明記して、本稿の末尾にしたい。

注

(1) 国華・徐培均編注『郭沫若旧体詩詞系年注釈』上・下(一九八四年 黑龙江人民出版社出版)



図8

(2) 邢小群「试析郭沫若在大跃进年代的诗歌活动——从《百花齐放》到《红旗》」

《歌谣》中国青年政治学院学报 二〇〇三年五月 贾振勇「“遍地皆诗写不赢——郭沫若大跃进时代的诗歌创作与诗学观念”『郭沫若学刊』二〇〇五年六月

(3) 拙稿「郭沫若の大躍進政策期に於ける書法様式の類型とその背景について」・「漢詩」の分析を中心とした政治性及び建築と書法との照合」『京都語文』二五号 二〇一七年十一月

(4) 儲著武「“厚今薄古” 1958年历史学大跃进」『安徽史学』二〇一七年一月

(5) 甘立荣「郭沫若诗中的“三异木”」『生态文化』二〇一五年十月

編集後記

■今号は第十一号以来の特集号。多くの方々に力のこもった、素晴らしい原稿をいただいた。編集子もいろいろ勉強させてもらった。周作人にせよ郭沫若にせよ、一筋縄ではない存在で、周辺の人々との人間関係の遠近、親交の深淺などで、見える／見せる姿も違うということが、彼らと密接な接触のあった人たちの証言から垣間見える。研究者の作家評価も好き嫌いや、関係の有無などが作用する面も無視できない。郭沫若と周作人についての掲載論文を拝読しながら、作家(に限らないが)や作品の評価の困難に思いをめぐらせたことだった。

■この秋には早稲田大学で開かれた日本現代中国学会全国大会で、郭沫若研究の現在」をテーマに分科会を開いた。発表者はすべて当会の会員だった。参加者も予想以上に多く、不十分ながら議論もあった。この特集号や現中学会での報告や議論が、日本における郭沫若研究や周作人研究に一石を投じるものになることを願いながら、今年を送る。

■来る二〇一九年がいよいよ一年でありますようお祈りします！

(二〇一八年十二月二十日 会報編集部)

郭沫若研究会報 第20号

発行日 二〇一八年十二月二〇日

発行所 日本郭沫若研究会事務局

〒八一〇・〇〇三一福岡市中央区谷二・二〇・八・三一岩佐方
TEL 〇九二・七一五・二五五四 (FAX 兼用)

メールアドレス japankakukuen@gmail.com

ホームページ <http://www7b.biglobe.ne.jp/~guomoruo/>

印刷 コロニー印刷 (社会福祉法人 福岡コロニー)